
DAYS -スーツを着こなす彼女-

宮座頭数騎・Lizreel (共著)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DAYS - スーツを着こなす彼女 -

【Nコード】

N4521M

【作者名】

宮座頭数騎・Lizreel（共著）

【あらすじ】

世界が、人類の文明が崩壊して数千年後に、この物語は始まる。彼女……それとも彼と呼ぶべきか。人であって人で無い者。人の形と書いて人形と呼ぶのが相応しいか。人により生み出された存在である者は、今日も主を捜す為に道を行く。これは、旅の途中のお話

chapter 1

何気なく置かれていた状況や身近にある存在に、ふと不満を抱きたくなることがあるだろうか。

それは誰でも起こりうることで、たとえば気弱な友人がある日を境に小生意気になって驚嘆するとともに疎ましくなったり。最初は夢中になって遊んでいた昆虫が何故か、たまらなく苦手になり触れられなくなる。逆も然りで、ずっと不味いと思い込んでいた食べ物がある日突然食べられるようになって好物となる。

心情の変化というものは、何の前触れもなく訪れるもの、なのだという。理由もなく、という点が実に人間的で興味深いが……自身に関しては、ありえないと思っていた。

だが彼はまさに体験しつつある。強烈な熱波と紫外線を浴びせかけてくる太陽を、憎みすらする。

惘然として上空を仰ぎ不遜に睥睨しても、悠然と佇むその巨軀から浴びせかけられる光条に当てられ、視界と体力を奪われるだけだ。触れることすら許そうともしないそれは、彼の頭上にあつて姿を誇示するかのよう、執拗に彼の背後を追ってくる。

「あつちい……、あちいよちきしょう」

太陽だけに燦々（サンサン）とね……、疲労と諦念のあまり誰も笑わないジョークが口に上りそうになって、彼は急に空しくなりトインダウンした。不満を述べても何の足しにもならないと、理解してはいる。それでも気を紛らわせるには、一定の効果があると思いたい。

彼の纏う漆黒のスーツは当然のこと、厭というほど日光による熱を吸収する。半ば黒スーツで果敢にも、いや無謀にも砂漠横断に挑んでしまったのは自業自得でもあるのだが……。

単純な話、体感温度を下げるためにスーツのジャケットを脱げばよいだろう。だが直射日光を遮らなければ熱射病の危険性は増し、極限条件下での危険な状態の継続は死に直結する。シャツに染みだした汗をじつとりと不快に感じつつも、黒い旅行用のトランクを砂上でずるずると引き摺り、歩き続ける。

見渡せど見渡せど、あたり一面砂の世界。

彼はいい加減に辟易とする、何もないにもほどがある。一体いつになれば目的地に辿り着くというのだろう。そんな不満をぐるぐると脳内に巡らせながら、彼の肉体疲労とフラストレーションが頂点に達したとき、ぐらりと視界が滲む。正気を失う前に、彼は意識を繋ぎとめようとともがきながら責任転嫁をはじめた。

思い起こせばそれもこれも、あの狡猾そうな情報屋のせいだ。

情報屋が自信満々に、彼の求める人物が南西のゼガリア大陸一の大都市アルカにいますとさえ断言しなければ。砂漠を行き当たりばつたり横断して生死の境をさまようこともなかった……と悔やまれてならない。

これほど疲弊しては先が思いやられる。単純な話、地図を買うべきだった。

彼が後悔しても時すでに遅く、情報屋に支払った報酬で一文無しになっていたため、彼は実際のところ地図を買うことすらできなかったのだが。暫らく歩みを進め、どさりと砂面に落としたトランクが砂煙を上げ、視界を曇らせる。

「まったく、なんちゅう火曜日だ」
デューズデー

砂粒を孕んだ風の向こう、僅かに蜃気楼のような街のシルエットが映り込んだのは、そんな折のことだった。

「つ……着いた」

一向に目的地に着く気配もなく、あるいは街の幻影そのものが蜃気楼だったのではないかに疑われたが、彼は生きて砂漠を抜け、街に辿り着くことができた。その喜びを噛み締める。

それにしてもよくめげずに頑張ったもんだよ、と、ついでに死力を尽くした自身の努力と運のよさを、過大に褒めちぎることを忘れなかった。少々大げさだが、それほど彼は安堵していた。

疲労と空腹、そして喉の渇きによって思考回路のギアは超低速にシフトチェンジしている。命からがら辿り着いたのはいいが、ここはどこだ？ そんな疑問も、しばし忘れていたほどに。

見上げた街の入り口に申し訳程度に掛かっている看板。それは実にお粗末なもので、刻印部分が吹き飛ばされているあたり、人為的に破壊されているように見えなくもない。それよりなお不自然なのは、街の中に一つも人影が見当たらないということだ。

いかに暑いとはいっても、街にはそれなりの活気があってしかるべきだ。暑さにうだる老人や若者が軒下に一人二人座っているか、せめて家畜でも外に出ていてくれると彼はすこぶる安心するのだが……街中を動く物影そのものが存在しない。

たち並ぶ一軒一軒の木造建築、商店の佇まいも気にかかる。ある店のショーウィンドウは散々に割り砕かれ、またある店のテラスの床は不自然に抜け落ち、ドアは破壊されて真つ二つにへし折られ、道に投げ捨てられ……人が見捨てて久しいゴーストタウンというより、つい最近人為的に破壊された有様だ。街の惨状を目の当たりにし警戒を強めつつ、彼が周囲にくまなく目を配っていたとき。

ん？ こいつは――

家屋や商店の床に、壁面に、玄関先の樽やそれらに無数にこびりついた大小の赤黒い斑紋。

「血か」

十分に乾いていながら血痕の境界が明瞭であることから、多少の時間が経過していることが見てとれる。さらに周囲に遠慮もなく飛散しているのは、鈍く輝く薬莢と銃弾。物騒な現場に居合わせてしまったようだ。数日以内に、賊にでも襲撃されたのだろうか。

「なんてこつたよ！」

命からがら、四日ぶりに街についたと思ったたらこんな羽目に。

彼は力なくため息をつき、ひとまず一軒の家の前に置いてあった防災用の樽に貯えてあった水を貪る。水分補給し、ようやく生きた心地がすると、待てよ、と気を取り直した。

むしろこの惨状がチャンスなのでは——と、気付いたからだ。犠牲者には気の毒な話だが、賊の襲撃を受けて間もないのなら、建物の中は死体以外には無人である可能性がきわめて高い。

食糧と、金目のものが残っていないか。一軒一軒、しらみつぶしに当たってみる価値はありそうだ。目下、死体は屋外には見当たらないし、血生臭くも腐臭もしないので、生き残った街の人々は難を逃れ、街を見捨ててどこかへ避難しているとみた。とすると、民家に残っている金品および食糧は“所有権の放棄された”ものと解釈して勝手に回収してもよさそうで……それを拝借して回することは、断じて空き巣ではない。

モノは人に使われる為に造られ、人に使われてこそ本懐を遂げる。置き去りにされ使われないのは不幸だ。この街に残された主なきモノ（主に金品）は全て、新たな持ち主に大切に使用され、その価値を存分に発揮すべきだ。だから彼はそれらを見捨てられたモノたちを、かの場所に責任を持って送り届けなければならない。そう、質屋へと。

だからこれは断じて空き巣ではない！ ついでに食糧も見つかれば、彼の胃におさまるのが食物としての正しい在り方だ。彼は常日頃の歪んだ持論に絡めて、犯罪の正当性を心中で主張する。意気揚々とお宝と食糧の探索に乗り出して数秒後——早々に出鼻は挫かれた。

「……なにこれ」

間の悪そうな顔で、素直な感想を小声で喉の奥に飲み込む。意表を突かれすぎて、俄かに状況を飲み込めない。何故、よりによって彼が最初の物色を入った建物に、先ほどはあれだけ捜しても出てこなかった人間、それも厳めしい顔つきと筋肉質の大柄な男たちが四人も、テーブルを囲んでダイニングに犇めき合って座っているというのか。若干狭そうにも見えるが、どうやら賊が略奪品で酒盛りをしていたようだ。

彼はひとときわ体格がよく、頭頂部の薄い男に至近距離から銃口を突き付けられている。

暢気にお宝探索のつもりでいたら、入った瞬間に即アウトというわけだ。これだから悪いことはできないと、世間の厳しさというものをまざまざと思い知る。

「おい、手を挙げる」

彼は愛想笑いを浮かべながら両手を挙げ早々に降参して、自身の不用心さを悔いた。それほどよく考えなくとも、このパターンに陥るということは判りそうなものだ。無事に街に着き、無人の民家で金目のありそうなものが物色できると浮かれて、ほとんど油断をしていた。

「姉ちゃんよ……何の用だい。ここは俺らの貸し切りだぜ、え？」

盗賊は彼を女性と決めつけてそう呼んだが、誤解されるのも無理はない。彼はその華奢な骨格と豊かなバスト、艶やかな金髪を肩で

透き切り、見目麗しい容姿から往々に女性と見紛われる。だが、彼の肉体は言うに及ばず、アイデンティティは女性というより男性に近い。

銃口を突き付けた賊は彼に顔を近づけ、血走った眼で舐めるようにしげしげと、彼を見詰めながら因縁をつける。酒を含んだ吐息がねつとりと彼の頬にかかり、その不快な臭気は吐き気すら催す。

「まだ生き残りがいたか、しぶとい奴だ」

「旅人じゃねえのか。トランク提げてるぞ」

奥に座していた茶髪で浅黒い肌の二人の男が彼の持ちものに目をとめ、座したまま腕組みし、悠長にそんなことを言いあっている。顔立ちと声、体格が似ていることから兄弟なのだろう。二人揃って顔一面にニキビができ、全体的に脂ぎったむさ苦しい印象を与えている。

「しかし上玉だ……。この女、高く売れそうだぞ」

手前に座っていた髭が長く白い皮のジャケットを着た大男も席を立ち、ハングアップしたままの彼に近寄り、執拗に胸や腰を睨め回す。

賊たちの卑猥な下心を意に介さず、彼の視線は一点、テーブルの上の酒瓶と食べかけのパンに固定されていた。飢餓状態のところ、食糧を目にしただけで空腹感は加速し食物へ思いが募る。

彼は場の空気も読まず、危機感も置き去りにして彼らに訊ねた。

「あの。すみません」

「ん？」

「腹減ってんで、なんか飯分けてください」

暫し沈黙が続く。

何か気味の悪いものでも見るかのように、訝しげな視線が彼に集

まった。彼の口調は完全な女性のそれからすると異質であるからか、はたまた発言そのものが場違いであるからか、お決まりの視線を向けられてうんざりくる。

そんなときに限って空腹のあまり、彼の腹が盛大に鳴く。食糧を見て条件反射的に消化器官が活動を始めたからだ。これが、一度鳴りだしたらなかなか止まらない。

「耳障りな腹の虫だな。その雑音を何とかしろ」

生理現象を雑音とまで言われ……彼は多少の気恥ずかしさが込み上げてくる。

「ええっと。多分、飯食えば止むと思いますんで、とりあえず何か分けてくんませんか？」

ともすれば相手を挑発するかのような言い回しで、彼はなお食い下がる。

「声と外見に合ってねえんだよ、口調と態度が！」

ああ、なるほど。彼は思う。

声が変なのではなく、言い回しが“女として”変。つまり女らしくしている。

だけど、そこまで非難される謂れもないのに。先ほどの彼らの奇怪な反応の理由が分かって、余計なお世話だと反論したい。外見や声は女性そのものでありながら、彼が男口調だから妙に思われるのだろう。

一応、下にもアレがついているんだがね……と主張するわけにも、見せびらかすわけにもいかず。

彼の性別は生まれつき明瞭でなく肉体的に男性と女性の間に入り、またそのどちらでもない。心身の不一致からくる他者との行き違いのせいで周囲に誤解を生じさせるようだが、彼自身は男性のもりでいる。

賊たちは事情を知らないので、粹がった生意気な女だと苛立ちを募らせている。なんだか、いやな展開になってきた。

一方、腹の虫は鳴り止む気配をみせない。

「てめえ……うるせえってんだよ！」

先ほどから銃を突き付けていた男の苛立ちは、宴会を邪魔されたこともあって頂点に達し、遂に無抵抗な彼のどてっ腹に拳の一撃を浴びせた。

胃を突き上げるような正拳をもろに受けて彼の身は僅かにしなり、えぐみを帯びた胃酸の味が口いっぱいに広がる。この飢餓状態では胃液を出すことすら勿体ないというのに。

どうせ喰らうならボディーブローではなく、そのテーブルの上のパンを……などと恨めしく思いつつ、彼が顔をしかめた瞬間^{とき}だ。

「やめなさい！」

不意に、ひきつれた少女の叫び声がして、賊からの第二撃目は制された。

何事かと振り仰ぐと、部屋の後ろにある、ウォークインクローゼットの中から少女が飛び出しハンドガンを構えている。年の頃は十代前半ぐらいだろうか。腰に掛かるほどに伸ばしたストレートの明るい栗毛。幼い顔立ちだが眉根を寄せてその表情は引き締まり、スカイブルーの瞳の中には、芯の強さを秘めている。オレンジ色の清楚なワンピースについた胸のリボンが揺れる、人形と見紛う美貌の少女。

華奢な素足で床に踏ん張り、たった一丁の銃で賊を脅迫しているつもりなのだろう。しかし援軍にしては頼りない。息を殺してクローゼットに隠れていればよかったものを……と同情するが、考えようによっては彼女の登場に目があったおかげで、賊から二撃目を喰らわず済んだという点においては、立派な恩人だ。

「そのまま動かないで！」

お願いだから、という言葉すら聞こえてきそうだった。銃を扱った経験がないのか、人に向けた経験がないからか、小さな手がガタ

ガタと震えている。一丁の銃では当然、全員に照準を合わせることができない。二丁拳銃でもなお足りない。多勢に無勢、荒くれ者たちが少女の銃口を怯える筈もなく、最初から勝負は見えていた。

「へへ……お嬢ちゃん、手が震えてるぜ？ 無駄な抵抗はやめて、そいつをこっちによこしな」

クローゼットの近くに座っていた男のうち一人が下卑た嗤いを浮かべて悠々と立ち上がり、真剣そのものの彼女をからかいつつ手を差し伸べ、じりじりと間合いを詰める。少女に銃を突き付けられ脅迫されているというのに、男は威圧感を伴って逆に彼女に詰め寄った。

「こ、来ないで！ 本当に撃つわよ！」

「どうぞ、どうぞ、撃てよ。へへへ」

本人もそう言っているので、遠慮なく撃ってはどうか。彼女の細い指で触れているトリガーを引き込んで、目の前で笑みを浮かべる男の額に、鉛の玉をぶち込めばいいだけではないか。情けないハングアップの体勢のまま、少女の立ち回りを見守り、言葉には出さず応援する彼は、最高に格好悪いと自覚はしている。

「だから来ないで！ 撃つって言うてるでしょう！」

「だから撃てって言うてんだよ！ 撃てるもんならよお！」

啖呵を切った男に怯んだのか、少女は間合いを詰めてくる男に怯んであとずさる。今にも彼女の銃に男の手がかかりそうだ……とても見ていられない。彼は大げさにため息をついた。

「しょうがねえな」

「何かいった……」

投げかけた疑問は、暴力によって物理的に叩き潰された。

彼は脇にいた髭男の顔面を力任せに殴りつけ、巨軀はノックアウト

トされた反動でバック転のようにはぜて頭部を床へとめりこませる。そのまま失神してくずれ折れ、銃を手放して無様な醜態を晒した。おやすみ——彼はそんな言葉とともに男を見下し、ゆらり視線を上げ涼やかな顔で賊の一味を一瞥する。華奢で無力な女だと侮っていただけに、事態が飲み込めず奥の二人が混乱するなか、彼に銃を突き付けて脅していた頭頂部の薄い男は、いち早く仲間が至近距離で不意打ちを喰らい激昂する。

「てめっ！」

憤慨した男が力任せに殴りかかろうと振りかぶった——が、腕は用を足さぬまま、平らな顎下を蹴り上げられた。その拍子に舌を咬んで血飛沫を噴いたので、口を閉じると忠告すべきだったと、彼は内心悪びれたが。それでも大男の足がふわりと浮いたところでタイミングを合わせ、彼は細い腰を捻り回転力に任せて真横に大男を蹴り飛ばす。

その結果。椅子に座っていた男に直撃し、巻き添えに男も吹き飛ばされた。両者抱き合わせる形で椅子から転落したことにより、二次被害でテーブルの脚が軋んで折れ、彼らの上を目がけて崩れる。食糧や酒瓶が床へとぶちまけられ、朦々と埃が舞い上がった。

「なっ、兄貴になにしゃがんだ！」

少女の銃を今にも奪おうとしていた片割れの男が、戦慄せんりつき混じりに声を荒げた。

兄貴ということはなるほど。こちらが弟というわけか——と、彼の些細な疑問がここでひとつ解消した。そんな合間に男は少女の銃を力任せにひったくると、銃口を彼に向けて狙いすまそうとした。が、時既に遅く、テーブル、椅子を蹴って身軽に跳躍を決めていた彼の放つ膝蹴りが、鼻先から顔面へめり込んだ。強烈な一撃を浴びせられた男は、吹き飛びながらガラスを突き破って外に投げ出され、何度か転がり、横になったままぐったりと動かなくなった。

鮮やかな手並みで一拳に三人を片付けた彼は、足元に転がっている男達をひっくり返して、まだ息があることを確認した。

素手で応じたので致命的ダメージにはなっていないだろうが、打ちどころが悪くて死んでも、そこは責任はもてない。

それにしても、せつかくの食糧が台無しだ。

空腹感は相変わらずである。見れば食卓の上に乗っていたものは散らかり、床上にはワインに浸ったパンが落ちている。埃っぽいが、少々汚れていてもありつきたいという衝動から、彼は躊躇なく足元のパンに手を伸ばす。軽く埃を払うと、あらん限り口に押し込んだ。

「それ、やめたほうが……」

傍らに寄ってきた少女が止めるが、飢えに支配された彼が聞きわけるはずもない。

結果として、それは後悔へと繋がるうとだ。

パンの中には、ガラスの破片が入り込んでいた。彼は表情を歪め、血色の霧とともに赤い色彩を含んだパンを床の上に吐き捨てる。口の端からとめどなく血液が滴り落ちる。思い切り頬張ったものだから、唇から口腔内から何か所となく切ってしまった。

あまりのショッキングな光景に、少女はきんきんとした声で悲鳴を張り上げた。

彼女の忠告を無視した手前不満を訴えることもできないが、悲鳴のポリウムの大きさに驚く。しかし災難に遭っているのはこちらのほうだというのに。やかましいいったらありやしない。

chapter 2

「だ、大丈夫？」

少女がおずおずと差し出した清潔なハンカチをありがたく使わせてもらって、彼は唇から血液を拭う。まだ口の中いっぱい鉄の味が広がっていた。

「さつきはありがとう。逆に助けられちゃったね」

そんな彼に、彼女は懸念を胸中に抱いたのか、申し訳なさそうに目線を逸らし、早口で先ほどの礼を述べる。

“逆に”と言うあたり、少女ながらプライドの高さが窺えた。子供が銃を持ちだして屈強な男たち相手に飛び出してきただけでも勇敢だが……。

「ん……まあ、気にすんな。お譲ちゃんが無茶するもんだから、ついな」

どちらかといえば無謀。彼からして見れば、この行動の結果は、とても褒められるものじゃない。馬鹿と天才は紙一重であるように、無謀と勇敢も紙一重だ。

「ねえ、あなた旅人なの？」

「そうだけど」

脚の折れていない椅子を見つけ、少女に冷淡な応対を示すと、華奢な青年は疲労困憊でふらふらと腰を下ろす。少女が食糧を恵んでくれるというのなら別だが、会話するのも億劫な状況だ、正直消えてほしい。しかし少女は彼の傍にまわりついて諂い、媚びた視線を彼に絡めつける。

両性具有であるからか、彼の性格からか、何かと好奇の眼差しで見られる機会が多い。だから彼も意識的に他者との関わりを避けてきた。周囲も彼に接触を持とうとはしなかった。これまでの経緯から、彼は彼女に下心があるのかと疑う。

彼が警戒を強いたのを知ってか知らずか、彼女は訊ねてもいない

のに自己紹介をはじめた。

「私はレーナ。あなたの名前は？」

「俺は……デイズだ」

やり場のない苛立ちを抑えて、彼はバリバリと金髪頭をかきむしる。煩わしいとはいえ、隠す必要もなかったので名乗り返す。その名はある種コードネームのようなもので、その出自はどれだけ調べても明らかにならない。

「デイズ（Days）？　かわってるのね、名前じゃないみたい」

「よく言われるよ。あんたで何人目だっけな」

彼のうんざりした様子にようやく気付いたレーナは、それ以上の追求はしないことにした。

だからこそなのか、ここらで彼女は、彼の興味を引く話を持ち出す。

「そうだ、あなた相当おなかすいてるんでしょ？」

悲しいことに、それは凶星だった。腹の虫を鳴らし、落ちた残飯を拾い、口の中を切つてまでありつこうとしていた食糧だ。何か非常食でも持っていることを期待しつつ、彼は物乞いをした。

「ああ、なんか食いもんくれよ」

「西のエリアへ行きましょう。あそこならまだ安全だし食糧もあるわ」

「何でまだ安全って判るんだ。お嬢ちゃん、この辺の住人じゃねえの？」

「ううん」

長くなりそうだから道中で話すよ。そう言葉を返す彼女はぎこちない笑顔をつくり、その裏に一瞬映じた孤愁^{こしゅう}を隠すようにダイニングを出て行った。

デイズもぶらりと腰を上げ、彼女の後を追う。レーナに言い包め^{くる}られている気がしたが、いらないと突っぱねるわけにもいかない。仕方無くだが、問題は西エリアまで移動するのに、体力がもつかな

レーナの故郷であるこの街はパラダイス・デザート（Paradise Desert）と呼ばれ、豊かな水源を囲う旅人や行商達のオアシスだった。主に交易や食糧中継地として栄えていたが、数日前からクロイツァー・ファミリーの連日連夜の襲撃によって地獄へと一変し、ヘル・デザートと化した。先ほど民家に陣取っていた賊は、例の一味だったとのことだ。

パラダイス・デザートは防災・防犯上の理由から五区画に分かれており、区画と区画を繋ぐ門によって固く仕切られている。だが既に三区画は壊滅状態。残るエリアは南側と西側のみ。レーナはデイズを最寄りの西側の区画に案内しようとしている。

「んで、お嬢ちゃんは何であの占領エリアにいたんだ？」

西エリアへ向かう道は、砂漠地帯にふさわしくなく、オアシスの齎す恵まれた土壌のためか、緑の下草が生い茂っていた。彼女は草を踏み分け歩を進めながら、無言を貫く。気まずい空気が流れ、レーナの幼い肩が小刻みに震えているのを、デイズは肩越しに見詰めた。彼女の肩が震えているのは、膺気楼と立ち上がる熱気のせいではない。

「あの家ね……」

絞り出すように、彼女は精一杯の声で答える。

「ああ、さっきの家か」

「おばあちゃんの家、だったの」

彼女の言葉に、デイズは先ほどの民家の間取りと、当時の状況を鮮明に思い出す。ダイニングから正面、クローゼットの奥に階段が続いていた。暗闇の奥へと伸びていた手すりと階段に付着していた赤褐色の血痕。あれが彼女の祖母の身に起きた惨劇を物語っていた。

「私の家、先に襲われた東のエリアにあったの。お父さんとお母さんは、私を逃がすために化け物から私を庇って……」

「化け物？」

デイズはつきりレーナの視点からの賊のメタファー暗喩と受け取ったが、そうではなかった。

レーナの説明がどこまで正確かは保留にしても、人間より一回り大きな体躯、蜥蜴のような頭部、脚は蜘蛛に似て、尾は蠍のそれだというのだから、彼女の両親を殺害したものは、そのままの意味での化け物だ。

話を聞く限り、彼女が遭遇し襲われたのは人工合成生物、コンパウン（Compound）だろうとデイズは目星をつける。賊がコンパウンを従えている——ということはアルケミを雇っているか、アルケミそのものが一味に所属しているとみて、ほぼ間違いない。

この大陸は未開の地も多く、各都市は政治・経済・文化において発展途上段階にある。だがごく一握りの、アルケミと呼ばれる科学技術の扱いに長けた者たちがいる。アルケミは錬金術、機械工学、情報工学、生物化学、生物医科学など高度科学技術を修めた技術者を示し、彼らの中には兵器として利用価値のありそうなコンパウンを造出し、高値で売買して生計を立てたり、コンパウンの性能を実証したりと、開発するためだけに盗賊団に志願する不屈きな輩もいる。荒んだ時世だからとはいえ、悪質なアルケミの創造するコンパウンによる被害は、近年、各都市においても無視できないものとなりつつあった。

「続けて襲われた中央区からも逃げて、西側に着いたの。けど、おばあちゃんのことを思い出して」

「助けに行ったら、ああなってた、と？」

レーナは離れて暮らす祖母を避難させようと家に立ち寄った。しかし彼女の祖母は既に賊の襲撃によって帰らぬ人となっていた。祖

母の死を嘆き悲しむ間もなく、次なる危機が訪れた。

「そう……。あいつらが入ってきて、急いでクローゼットに隠れたらそこで酒盛りをはじめて、出るにすらなくなってる」

それから後のことは、デイズも周知のとおりだ。

「わりい、嫌なこと聞いちまったな」

デイズはからつとした口調で、しかし沈痛な表情を向けた。

「いいの。ごめんね、私の方こそ暗い話をして」

今日の今日、肉親の死に遭遇した幼い少女。暗い話……と一言で割り切ってしまう彼女はしかし、強靱な精神力を持つていているわけではない。無理をしているのが表情や言葉の端々に見えて、痛々しかった。危機ははまだ去らず、嘆き悲しむ時間すらもない。彼女が謝る必要はない。謝るべきは、街を襲撃したクロイツアー・ファミリ―だ。

クロイツアー一味のような賊の襲来は、珍しいことではない。人心が乱れ治安が悪化しはじめたのはとりわけここ数年のことだ。悪が蔓延し、再び退廃と戦禍の暗黒の時代を迎えようとしているのか。過去幾度となく繰り返した人類の業を、あたかもそれが人間の本質であると証するかのように。

デイズは表情をこわばらせ、砂丘に沈む夕暮れの空を眩しげに仰ぐ。

全ての始まりは今を遡ること二十年前。このとき、人々は技術の黎明^{れいめい}をみることとなった。

人里離れた森の奥から発見された古代遺跡群が、人々の生活や価値観をも一変させた。遺跡の奥には幾重にも張り巡らされた封印に隠された高度な古代技術の痕跡があり、膨大な量の埋葬品と古い文

献が発掘された。

古代言語は現代の言語と共通している部分が多々あり、文献はそれらと照らし合わせ、ほどなく解読されはじめた。人々が忘れ去るほどの遠い過去、この大陸には高度に発達した文明が存在し、栄華を極めていた。

その後、遺跡の発見を皮切りに大陸各地から類似した遺跡群が見つかり、散り散りになった古の技術・知識体系は統合・補完され、ひとつの総合学問としての完成形をみる。

遺跡から得られた知識と技術は瞬く間に各地へと伝えられた。遺跡群から発見された古代技術と学問体系を学び扱う有識者集団が、古代の錬金術師になぞらえてアルケミと呼ばれ、尊ばれるようになったのもこの頃だ。

デイズは一人のアルケミの女性をマスターと仰ぎ、仕えている。いや、不本意ながら現在では、いた……と言った方が正しい状況になりつつある。デイズの身に纏う漆黒のスーツは、彼女への従属を誓うものといえなくもなかった。

彼女はいわゆるアルケミの一人で、遺跡へのフィールドワークに幾度となく出かけた。彼女が調査していた遺跡は、他の遺跡と比較して最大規模かつ最高水準のもので、そのため発掘された資料も文献も膨大だった。他の都市を遥かに凌駕する技術力・軍事力を持つ都市文明が存在したと推測される。

彼女はそれらを持ち帰り、飽くなき探求心から解読に心血を注ぐあまり、一日中部屋に閉じこもって出てこなかった日もあり、デイズを随分心配させたものである。

彼女が文献を紐ときデイズに語った言葉、古代人が現代の人々に向けて鳴らした警鐘を、彼は反芻する^{はんすう}ように思い出す。それは彼女だけが知りえた事実。

高度な技術を誇った古代の世界は、滅ぼされていた。

ほかならぬ、人間の手によって――。

権力、技術力、暴力に財力……。凡そ、力と呼べるものを手にしたとき、それをかさにきて奢り、妬み、互いに争い墮落するのは人間の性だ。大量殺戮兵器を用い、各都市間で幾度となく武力衝突が繰り返され、遂には大規模な戦争へと発展し、科学兵器が人類を根絶させるまでとなり、高度古代文明は失われた。

そして生き延びた古代の人々によって、これらの技術は人里離れた山や森の遺跡へと秘匿^{ひかく}され、厳重に封印された。

しかし、愚かしくも古代の人々の犯した過ちを倣うかのように、デイズとその主が暮らしていた国は、古代遺跡からの技術の軍事利用を目論む各国の標的となり攻め込まれ、終戦から十年経った現在も不安定な情勢が続いている。

遺跡発掘から二十年を経て、各地の遺跡は、より高度かつ強力な技術を狙うアルケミヤプローラー（探検家）によって調べ尽くされ、彼らの往来に乗じて多くの人々が各地へと足を運ぶ時代となり、人の流れが流動的となったことで移民も多く発生した。

国家は国境という垣根と機能を徐々に失い、失業率も上昇、経済は破綻、国軍の規律も緩み食糧事情も衛生状態も悪く、賊によって略奪行為が横行、どの国の治安も悪化の一途を辿っている。

そんな話を彼に語り伝えたマスターは、デイズの主であると同時に創造主であり、この世において唯一無二の存在だ。そしてデイズは一人のアルケミが大変な労力をもって古代技術の粋を集め試験管の中で創造した、人型人造生命（イン・ヴィトロ・ヒューマンライク・クリーチャー：in vitro human-like creature）である。

彼は命なきもの。だが知性も自我も感情も、アイデンティティすらも備わっている。

ただの物質であつたデイズが、これほどまでに人間に近づくことができたのは、彼女の技術力の高さも確かにあつた。だが、その超絶的な技巧の賜物というよりは、デイズに命を吹き込み、慈愛をもつて忍耐強く、人間らしく接し続けたからという理由が大きい。

彼女が何を目的としてデイズを造つたのか……。未だその問いに、彼女は答えてくれたことはない。

ただ彼女の技術を実証するためにすぎなかつたのか。違う。

そうではなく……。遺跡から得られた叡智^{えいち}、古代人が未来へと托したそれは、咎と暴力を生むために残されたものではない。いつかその技術が正しく利用され、人々が正しい心で成熟した文明を築いてゆける時代が来るように。それが遺跡を封じた古代人の願いであり、遺言でもあつた。彼女はそんな願いを受け、古代技術をもとにデイズを造つたのではないか。

漠然と、デイズはそんな気がしていた。

彼女の優しい微笑み、彼女との忘れがたい思い出が、人間のそれを模した人工の脳裏に色鮮やかに浮かんで消えた。

「ねえ」

主の言葉を感じ深く思い起こして思索に耽つてみると、レーナが歩調を緩めてデイズと並んだ。きらきらと輝く、まっすぐな瞳でデイズを見据える。純粹なのか、そう振る舞っているのか。相変わらずレーナの意図は掴めない。人間の心の機微を理解することは、どれだけ訓練したとしてもデイズには難しい。特に、その表情の裏に偽りが含まれている場合には――。

「デイズって、どうして旅をしているの？」

「ある人の行方を追っているんだ」

マスターの容貌を説明したところで、広い世界中からたった一人

を見つけだすことは困難を極める。尋ね人の似顔絵などがあればよいのだが、生憎そんな気の利いたものも持ち合わせておらず、かといって誰かに説明するだけの絵心もないのが残念だ。ほうぼう捜し回って、自らの足で確かめるしかないようだ。時間を無駄にしている間に彼女に万が一のことがあつて、手遅れにならなければよいが……とデイズは懸念する。

「その人の名前は？」

搜索に協力してくれるというのか、レーナは腕組みをして詳細な情報を促す。

「オフィーリア・ハーシエルだ」

ぶつきらばうな口調で頭を掻きながら、彼女の面影がふわりとデイズの脳裏に横切った。デイズの前から忽然と消息を絶った麗人は抜けるように白い肌の、艶やかな銀髪の女性だった。慈悲深く静謐な、どこか陰のある穏やかな賢人。デイズはオフィーリアを誰より美しく、あるいは神々しいとすら思っていた。

どう説明しても、レーナには漠然としか伝わらない。情報が不足している。外見的特徴と名前だけで人捜しができるほど、この大陸は矮小なわけではない。

「簡単に見つかるとは思ってないんで、気にしないでくれ」

心当たりがないか真面目に悩み続けるレーナを追い詰める前に、デイズは気を遣って話題を切り上げ、暢気にそう言った。焦りは禁物だ。焦ってガセネタを掴んでは逆に真実から遠ざかり、時間を浪費する。どんな些細な情報でも、着実に信頼できるものを集めて積み重ねてゆくほかない。

「ごめん。兄妹とか、お母さんのの？」

「姉でもあり、親でもあるな……まあ細かいことは気にすんな」
彼はもごもごこまかす。レーナは困ったように首を傾げた。

デイズが遺跡の探索に行っている間に、帰ってきたら屋敷には彼女の姿がなかった。荒らされた形跡もなく、研究室のデスクに一枚、殴り書きのメモが置かれていた。

誘拐されたので、助けてくれと。

そもそも、誘拐された人間が“誘拐される前に”自宅にメモを残せるわけがないだろうにと、デイズは思うのだ。そんな危機感に欠ける救難要請に啞然としながらも、何か事情があるかタチの悪い冗談なのかと捜し歩いたところ、これが本当に失踪していたようで、彼女が黒いフードを着た一団と国境を越えたという情報を得た。彼女を追ううち彼も国境を踏み越え、彼女を捜し求めるうちに大陸を横断してしまったという次第だ。

「ま、そんな流れで砂漠を渡って、ここへ着いたのさ」

一言では言い尽くせないほど散々な思いをしてきたのだが、落ち込んでいた彼女に余計な気遣いをさせないよう、少しおどけて大きなため息をついてみせる。

「そうなんだ。女性の一人旅って危険なんじゃ……でもデイズなら大丈夫か」

レーナは目の前の華奢な女性が垣間見せた、男勝りの怪力を思い出して頼もしそうに微笑むと、前言を撤回した。女性が男性かという点を訂正するかはさておき、祖母の死の気が紛れてようやく笑顔を見せたか、とデイズが彼女の表情を覗きこむと彼女は俯き、表情はまた暗鬱な思いつめたものになる。つられてデイズの表情も沈む。「西地区に着いたら、町長さんに会ってもらいたい」

断ったら食糧にはありつけないという脅しを、やんわりと言外にちらつかせている。

彼は食糧と引き換えに、レーナの提示した条件を飲むこととなった。

これは何やらひと波乱ありそうだ。そこはかたなく嫌な予感がしたが、的中しそうだから困る。

西地区に到着し早速町長と面会したが、まずは腹ごしらえだと食糧を要求すると、デイズは決して小奇麗とはいえない、うらぶれたレストランの二階に案内された。テーブルマナーもお構いなく、彼はテーブルの上に並べられた料理を、片っ端からきれいに平らげてゆく。客は一人もない。隣にはレーナ、対面にはやつれた白髪頭の町長が沈んだ表情で食卓について、彼を見守っている。レストランはクロイツァーの襲撃により休業していたが、デイズのために特別にあげたのだそうだ。

「うまい。うますぎる！」

最初は空腹が限界に達していたので味わっている余裕などなかったが、やや腹が落ち着くと味を楽しむ余裕も出てくる。砂漠の街のレストランらしく、食材はオアシスの周囲でとれた新鮮な野菜と肉が使われ、地産地消のスタイルだそうで、とりわけ美味しく感じられた。

だが、一方の二人は食事も喉に通らないらしく、出された皿に手をつけない。

「喰わねえの？ あんたら」

「ええ……とてもそんな気分では」

そういうことなら遠慮なく。言うが早いか、手を伸ばし彼らのハンバーグプレートも横から掻っ攫い、鶏肉を食いちぎり、パンにシチューを大口でガツガツと慌ただしく詰め込み、シャツのボタンを胸元まで外しリラックスすると、満足そうに咀嚼する。町長は細身の女性にしか見えないデイズが体格に似合わず男性顔負けの健啖家なので啞然としている。本人はただの大食“漢”のつもりだ。

彼には満腹中枢がないのだから、満腹になるということがない。そんな恐ろしい裏事情を、彼らにはまだ伝えていない。

「宜しいでしょうか。そろそろ本題に入っても」

町長はデイズがあらかた料理を片付けたので、控えめに切り出した。

「ああ、どうぞどうぞ。どうせある程度は聞いたんだろ？俺のこ
と」

要はデイズが利用価値のある人材であるか否か。彼の理解が思いのほか早いので、町長は腹に一物あるといった表情で生唾を飲み、頷く。

レーナはデイズの腕前を高く買って町長に売り込んだ。気前よく食事を振る舞ったその見返りに、用心棒にでもさせようとしているのだろ。もしくは暗殺、復讐などの厄介事を押しつける魂胆、せいぜいその程度のことだろうと、デイズは思っていた。この認識が甘かったことに、彼はのちほど気付かされる。

「あなたはクロイツアーの部下を歯牙にもかけなかったとか」

歯の浮いたようなお世辞。それみたことか、とデイズは閉口する。やはりクロイツアー・ファミリーに刺客として差し向けようという思惑が見え透いている。

「クロイツアー・ファミリーを潰せって依頼か？」

彼はナプキンでこしこしと下品に口元を拭いながらそう言った。

「いえ、少し違います」

老獪な町長の眼光が鋭く輝く。

「いかに言っても、それは不可能でしょう。特に、女性の細腕一本では」

「へえ……」

デイズは食事の手を止め、大きな音を立ててナイフとフォークを

乱暴に皿の上に置いた。彼は町長を見据え、何かを押し殺したように、冷たく薄い微笑みを浮かべる。

彼の纏う空気が一変したのを感じとったか、レーナの肩がびくりと震える。

体格から受ける軟弱な印象のせいだろう。随分と町長に見くびられたものだ。あるいは彼の創造主以外の、明らかに戦闘経験すらなさそうな人間からたやすく値踏みされることに、我慢がならなかったのかもしれない。

一人で全員と、同時に素手で戦えというなら確かに、町長の言うよう不可能かもしれない。だが、戦術はごまんとある。

「ですから、あなたには囹役をお願いしたいのです」

西地区の住民たちが寄り集まって話し合い下した結論は、戦わずして街を捨て逃亡する。この一択だった。パラダイス・デザートの実段階における被害状況は深刻で、復興には時間がかかる。また、一度賊に襲われた土地には安全上の問題から、二度と住みたくないというのが残された住民の総意だ。

だが、こちらが白旗を上げようにも、賊はこの街から住民を一人として生かして出してはくれない。何故なら、一人でも逃せば他国に亡命してこの街で起こったことを洗いざらい話し、軍隊を呼ばれる可能性すら否定できないからだ。西地区の人々はクロイツァー・フアミリーに気付かれないうちに街を捨て、砂漠を越える旅支度を着々と整えつつあった。

出立は夜中過ぎ。他の地区が襲撃されている間に夜逃げというわけだ。これだけでも見下げ果てた連中だとデイズは思うのだが、詳細を聞いてよりいっそう軽蔑した。追っ手を確実に振り切るには、人々が街を出て砂漠を越えるまで時間を稼ぐ必要がある。

街がもぬけの殻では、賊に気取られる。

誰かが残って、普段と変わらぬ街の夜を演出しなければならない

のだ。しかし平和ボケしたこの街の住民に、手を上げる勇氣のあるものは殆どいなかった。我が身かわいさに、恵まれた体格をした若者でさえ、道中の護衛に男手がいるだろうとか、持病がぶりかえしてだの、あれこれ理由をつけてその役回りを逃れようと必死だ。

「依頼というより、生贄になれって訳か」

その認識に、概ね間違いはない筈だ。外見は女性のデイズに依頼を持ちかけなければならぬほど、人手が足りないということだった。

「あくまでも囹、足止め役です。頃合いを見て逃げていただければ、それでよいのです」

凶星だったのか、町長は体裁の悪そうに顔を真っ赤にして椅子から立ち上がると、お願いしますと深々と頭を下げる。平和な街がある日突然賊に急襲され、老いた町長の心労は察するが、その態度が気に入らない。

「わかった」

「本当ですか！」

その一言を聞いた町長とレーナは表情を輝かせた。

「ああ、この依頼が実に価値のねえものだってな。この依頼はうけない」

デイズは街のおかれた状況をよくよく理解した……ただし、彼らの期待に添うつもりは微塵もなかった。デイズは彼らの顔を見ようともしない。彼らは青ざめて笑顔を引っ込め、なりふり構わず説得にかかる。

「な、何故です。お礼は即金、前払いでお支払いますから」

それなりの高額な報酬は支払う、約束するからと。確かに現在無一文となっている彼に旅銀は必要だ、金銭的な報酬に魅力がないわけではない、だが不実な町民から施される、薄汚れた金を受け取る

つもりはさらさらない。

「そういう意味じゃねえ。依頼内容が腐ってやがる」
「そんな……」

「それともあんたらも、一緒に残って罔になるのか？」

彼らは揃いも揃って口を開かず、首を縦に振らない。実に醜い。慈善家ではないのだから、命がけで守る価値もない。住民が奮起し賊に一矢報いようというのなら快諾したかもしれないが……デイズは彼らを見下げた。

「ほら。あんたら、わが身がかわいばかりだな。……俺も同じ性質でね。他人が殺されようがどうなるうが関係ねえ。どうでもいいんだよ」

彼は唾棄するように呟くと、乾いた嗤いを浮かべ踵を返し、その場を立ち去ろうとした。その時だ。俯いていた町長の口角がいやらしく、僅かに吊りあがる。

「では、只今の御食事代はあなた持ちでお願いします」

「!？」

「はて、この店の料理を“こちら持ちで”とお約束した覚えはありませんが。なにしろあなたは大量に召し上がりましたから相当な額になるでしょうな。料理長、お客様がお帰りだ」

町長がわざとらしく両手を打ち鳴らすと、厨房から体格のよいシェフたちが階段を上ってくる。レーナは俯いて申し訳なさそうな顔をしたが、町長を制する気配もなかった。

「お会計はこちらです」

実は金を持っていないとデイズが打ち明ける前に、シェフは二千シエンスと書きつけられた領収書を提示した。安くはないだろうと判ってはいたが、支払える金額ではない。彼は右から順に、桁を数

える。一桁多くないかね、これ。

「おや？ どうされました。まさか一文無しなんてことは……ありませんよね」

デイズが顔色を変えたのをいいことに、町長は白々しく皮肉を言う。そのまさかだ、一銭もない。

いや、財布の中には小銭程度の持ち合わせがある。かといって、それ相応に価値のある金目のものも持っていないわけ。というより、最初から町長はそれと踏んで料理を振る舞ったのだと、今になって思えば分かりきっていた。動揺するデイズを小気味よさそうに見詰めながら、町長は含み笑いを浮かべている。

清々しいほどに、デイズは彼らに嵌められた。立ち回りの巧さは町長とはいえ政治家のはしくれたな、と妙に納得する。ひと暴れしてこの危機を脱することもできる。勿論できるが――下心ありとはいえ料理を振る舞ってくれた人間を傷つけることはできない。

一般人を傷つけてはならないと、デイズはマスターから教わったわけではない。だが、それをやってしまうとマスターに顔向けできないような気がした。彼女の顔に泥を塗りたくない。彼はどうしたものかと思案する。

考えた挙句……

「さあ、いかがします」

彼は俯いていたが、突然何かが吹っ切れたかのように椅子から立ち上がり、含み笑いをした。

「ふ……ふふ……」

笑いながら彼は腰を落として屈伸をし、大きく手を振り上げたり関節を伸ばしたりとストレッチをはじめ。現実を受け入れられず気がふれてしまったのか。誰もが顔を見合わせて奇怪な行動に呆れ

たとき……

彼は料理長の目を盗んで部屋の隅に向かって駆け出す。加速をつけて窓ガラスに頭から飛び込み、ガラス片をしこたまかぶりながら、そのままひらりと窓枠を飛び越える。

「さらばだ諸君！」

ガラスくずをクリスタルのように月光に反射させながら、瞬く夜景の中に飛び出し空に舞う。慌てて町長とコックが駆け寄り、割られたガラス窓の下を見ると、墜落の衝撃をもとめせず、信じられない脚の速さで一目散に走り去ってゆく、黒い女のシルエットが見えた。

「く、喰い逃げだ——！！」

料理長の絶叫は、静まり返った街の空に残響していた。

ここまで来れば大丈夫だろうか。追手を振り払い、喰い逃げ犯らしく、彼は胸をなでおろす。

食事を終えてすぐ、満腹状態で全力疾走したものだから、脇腹が痛くなってきた。少し時間が経って、辺りを見渡す余裕も出てくる。彼は今、小高い丘の間に掛けられた道幅の広い石橋の上を歩いている。眼下には夜の街並みが広がり遙か遠くには砂丘が見える。空気の乾燥した満点の星空だった。

「へえ、長閑でいい眺めだな」

その街が今や、長閑とは程遠い状況になっている。彼らに手を貸さなければ、どうなるのだろうか。デイズは残された人々の辿る運命に思いを巡らせた。街を見捨てた彼らの避難は成功するのか、はたまたクロイツァーの一味に見つかり殲滅させられるのか。

どうなるかと、関係ない……彼はそう思い込むことにした。

「見つけた」

不意に背後から人の気配がして、デイズの鼓動が激しく脈打つ。恐る恐る振り返ると、長い月影を足に纏わせたレーナがそこに佇んでいた。

彼は相当な距離を全速力で走ったつもりでいたが、何故いとも簡単に見つかるのだろう。デイズの脚力に追いついたとは思えないから、この場所を探り当てた女の勘のたまものだろうか。恐ろしい、彼は首をすくめた。

「はい、忘れ物」

彼女はデイズが置き去りにした重いトランクを、細い腕で抱えて運んできた。彼女が放り投げようとしていたので、彼は慌てて受け取る。

「おお！……サンキュ」

すっかり忘れていた。

財産らしきものはないが、大事なものはトランクの中に入っている。何か盗まれていないか、手にとって先ほどと同じ重量であることだけを確認する。10 kg 近くはあったから、重かっただろうな。彼女の指が、かじかんで固まっている。デイズからすればどうということもない重量だが、非力な少女のことだ。

ふと彼女を見詰めていると、彼女は一時不随となった手先を背の後ろに隠した。

「遠くに行つてなくて良かった。ここは視界が開けているから、デイズがすぐ見つかるかもつて来たの。追っ手はいないわ」

「なるほどね。搜して、どうしようかと?」

彼女はこの場所にデイズがいると知っていたのではなく、見晴らしの良い場所から搜そうとしていた。そんなレーナが意外と合理的な思考の持ち主であることに感心していると、彼女の表情がまたかき曇った。

「……ここは、私の家族との思い出の場所でもあるの」

彼女は俯くと、髭の手すりに寄りかかり頼杖をつき、思わせぶりにため息をつく。

またか——その表情にまだ媚びた色が見えたので、デイズは敢えて彼女の話の聞かなかった。受け取った荷物を手に、彼は背を向ける。

「お嬢ちゃん」

「……なに?」

「何が正しいのか……もう一度、じっくり考えてみる」

彼女に冷たい一言だけを残し、何事もなかったかのようにデイズはその場を立ち去った。

仮にデイズがクロイツアー一味と戦うとしたら、多少面倒ではあるが、時間をかければ負ける気はしない。だがレーナの狡猾な下心を見抜いてしまった以上、やすやすと手を差し伸べるわけにはいかない。ひねた考えかもしれないが、哀れな顔で同情をひかず頭を冷やして、せいぜい考えることだ。

大切な思い出の場所を明け渡したくないならば、悩み抜くべきだ。饒舌な口を閉ざし、静寂の中で自身の心に立ち返り、まだ彼女の心に一かけらでも正義を貫く心があるならば。少しずついい、全身から掻き集めて束ねたそれを、やがて小さな拳を握りしめて高らかに示せるかどうか。それが人間として、彼女が一人の人間である為になすべきことだ。

手は貸さない。最善を尽くさずしては。
彼女が勇気を奮い起し、傷つく覚悟を決めるまでは。

chapter 3

深夜。

デイズは公衆便所の中にこもって、腹痛に苦しんでいた。慣れない土地の食べ物か水にあたったのかもしれない。まあ、一番の原因はあれだけの量を一度に食べれば体調も悪くなるというもの。食べ過ぎだ。

「はあ……こんなことならあんなに食わなけりや良かったな」

彼が前かがみになり、ため息混じりに反省をしたとき——それは突然のことだった。

便座から飛び上がるほど大きな炸裂音に見舞われ、直後、爆撃された地響きと衝撃波に叩き伏せられ、思わず呻き声が漏れる。

爆音が教えた情報は、爆心地は近いということ。トイレの扉が爆風で吹き飛ばされデイズの上に倒れ掛かってくる。

阿鼻叫喚の悲鳴、怒号とともに半狂乱になりながら走り去る街の人々の一群を、彼はズボンを下ろしたまま半壊したトイレの中で息を殺し見送った。避難者の中には、たまにこちらに顔を向ける者もいて、彼のあらわになった下半身を見ても特に反応なく走り去っていった。暗がりだということもあり避難にも必死で、それどころではないのだろう。何事もなかったかのように視線を戻し、足をもつらせて駆け抜けてゆく。パンツをおろした姿をまじまじ目撃され羞恥心を覚えるが、リアクションがなければいいで、より恥ずかしくなる。

空爆が始まったのか、爆撃音と銃声もいたるところから聞こえてくる。一気呵成に、大規模な攻撃がはじまったということに察しがつく。仕掛けたのはクロイツァーの一味だ。西地区の人々の避難を察したのか、どこからかリークがあったのか、一斉掃討にうつて出

ただ。

「ふざけやがって。チツ……俺も動くとするか」

彼は気を取り直し、きつくベルトを締めると、降り積もった瓦礫をかきわけて公衆便所から脱出する。そこで彼は刮目した。

瞳に飛び込んできた光景は。悲鳴を上げながら逃げ惑う人々。その背後に容赦なく撃ち込まれる銃弾。鮮血に塗れ、力尽き倒れる。武装した男達が、老若男女、丸腰の人々を的につけて散弾銃の弾丸の雨を浴びせかけている。

そのとき、二人の子供を手引いて逃げる母親の背に、無情にも銃口が向けられた。下卑た薄笑いを浮かべた男が慣れた手つきでトリガーを引く。

銃声が反響する、だがその弾丸が彼女を射抜くことはなかった。

デイズは彼らを庇い弾道上に立ち、靴裏で的確に凶弾を捕捉した。凶弾は地に蹴り落とされ踏みにじられる。

まさに人間の身体能力を越えた、コンマ数秒間に成された神業だった。

瞬間移動で現れたかのごとく、忽然と割り込んできた黒スーツの女に、度肝を抜かされたのはクロイツァーの部下たちだ。

「な、なんだてめえは！」

「公衆便所半壊させたのはお前らか」

「はあ？」

人々への被害はさておき、といった様子で厳しく彼らを問い詰める。彼らからすれば、今更それが何だ、と言いたいところか。デイズは両手を胸の前で組むと、指の関節を鳴らし、頸部の可動を確認し戦闘態勢に移行する。彼の瞳は怒りに滾っていた。

「ママンから教わらなかったのか？ 公共物は大切にしろ……てな！」

「！？」

そんな台詞とともに一気に間合いをつめ、反動をつけて飛び膝蹴りを下顎に叩き込む。そのまま二段蹴りの要領で大柄な男の肋骨を正確無比の一撃で破壊して蹴り上がる。続いて宙返りをうち、落下ついでに手近にいたもう一人の脳髓に、重力加速度に乗せた踵での蹴撃を見舞う。

デイズに襲われた男は動物じみた悲鳴をあげた。鼻から一筋の血液が伝い、白目を剥いて痙攣して倒れ伏す。

「へへっ！」

骨も実もない烏合の衆だが、肩慣らしには丁度よい。

ニヤリと口角を釣り上げて、デイズは倒れた男の足首を握り、大きく円を描いて振り回す。遠心力を利用し同心円状に悪党どもを薙ぎ倒し、次々と蹴散らしてゆく。

「何だあいつは！」

「やつちまえっ！」

増援がやってきたので、デイズは遠心力をかけたまま素っ気無く男の足首を手離した。男は仲間目掛けて一直線に飛んでゆき、一団は煽りをくらって派手に吹き飛んだ。

「ご愁傷様ってな」

それにしてもこの快投、ピンが人間だということを除けば、マスターから教わったボウリングというゲームにそっくりだ。今の一投はターキーどころかクリンゲームだろう、デイズは不謹慎にもそんな感想を懷いた。

「さてと、おい、その野郎共！」

「は、……はい？」

彼は遠巻きになって一部始終を見ていた、体力のありそうな街の青年たちを指名する。避難途中なのを呼びとめられて、彼らはおどおどしく怯えた視線でデイズを見る。

「転がっている悪党共をふん縛っておけ。ついでだからこいつらの武器を奪ってお前らも戦えよ」

デイズはせつせと気絶した男達から銃と薬莢を奪い、彼らに放り投げる。彼らがまごついていたので、じれったく思ったデイズは厳しい声色でどやしつけた。

「返事は！」

「は、はいっ!？」

「いいか、俺は今からその辺の奴らを一扫してくる。お前らは戦え。そう奴ら集めて、俺が倒した奴から装備を奪って攻撃に参加しろ。戦う手段があればやれるだろ、なあ」

やや沈黙があつて、一人、また一人と頷くものがでてきた。

「よし、俺に続け！」

デイズは駆け出しながら、彼らの空気が変わったのを肌を感じていた。消極的、逃げ腰、他人任せ。どうしようもないほど臆病だった彼ら、しかし追い詰められれば底力が沸いてくるものだ。火事場の馬鹿力というか何と云うか。

窮鼠猫を囓む、と言うのだったか。多分、間違つてはいない。退路はとつくに断たれている。さて、逆襲の開始だ。

デイズは先頭に立って人々を導き、次々と武装集団を制圧してゆく。それとともに人間離れした身のこなしと卓越した戦闘力を、彼を追う人々の目に鮮烈に焼き付けた。

住民の蜂起を阻もうと、自走砲台が猛スピードで彼ら目がけて突っ込んできたので、デイズは疾風のごとく狙撃手を倒して路上に投げ、まんまと砲台を奪取する。最初はおっかなびっくりだった住民たちも、素人の寄せ集めながら銃器の火力にものをいわせて徐々に強気になり、戦況は優勢に傾いてきた。この状況なら、デイズがずっと先導していなくとも、何とかなるかもしれない。

それにしても、レーナの話によればクロイツァー・ファミリーはコンパウンを連れていたというのだが、まだ遭遇していない。本隊

は別の場所にいるのか。デイズは嫌な予感がして、コンパウンを捜すためレーナを置き去りにした先ほどの高台に一人で引き返し、見晴らしのよい場所から再度街を見下ろす。砂漠から吹き上がってくる夜風をしこたま浴びながら、トランクから双眼鏡を取り出し一望すると、西地区の入り口付近にコンパウンと思われる巨大な影が複数体、屹立しているのが見えた。

「ひい、ふう、みい……ざつと九匹か。ん？」

そのとき、双眼鏡の丸い視界に、棒切れを手にしてコンパウンに突撃してゆく小さな影が映りこんだ。

レーナだ。

逃げ遅れてやぶれかぶれに突進していったのか。あるいはデイズに捨てられ、背水の陣を悟り、彼女の……勇気と覚悟がそうさせたのか。……デイズは考えを改めると言いたかったつもりが、レーナには伝わらなかった。何も実力行使に踏み切らなくともいい、そこまですなくていい。彼女を追い詰めてしまった。デイズは図らずも彼女をコンパウンに彼女をけしかけたことを猛烈に悔いた。彼女がしていることは確かに、勇敢だ。だがその勇気は必ず、酬いられるものでなければならぬ。勝算なく犠牲を払うだけの反抗など、ただ愚かなだけだ。

「ちっ！ まだ死ぬんじゃねえぞ！」

彼は橋の手すりを乗り越え、十数メートルもある石橋を飛び降りる。落下しながら数度橋脚を蹴って摩擦力で速度を殺し、中空で踏み切って宙返りし民家の屋根上に羽毛のように軽やかに着地する。屋根の上を次々と飛び移り駆けながら、目指すは一直線上にレーナのもとまで。最短距離をぶつちぎる。

レーナの奮闘空しく、彼女は部下たちに捕らえられ、後ろ手にされてクロイツァー・ファミリーの一味の前に突き出されている。彼女は屈服させられた状態でも身体を絞り、僅かな抵抗を見せていた。

デイズはコンパウンを操っていると思しきアルケミを視認する。

あと少しでいい、どうか間にあって、無事でいてくれ……。彼は何にともなく祈っていた。

数十人の男たちに囲われ、レーナは一人の男の前に連れ出される。レーナの前にいるのはひととき異彩を放つ痩せ型の男で、黒いコートにゴーグル型アナライザを装着しているため顔はよく見えないが、適性解析用暗視スコープを兼ね備えている。彼は一人だけ武装をしていない、一味の中でも浮いた格好をしている。

「ごきげんよう勇敢なお嬢さん。お前が棒切れを片手に誰に挑んだか、分かってのことか」

男はゴーグルを取り、痩せこけた素顔を晒して、薄笑いを浮かべた。脂ぎった黒髪を七三わけにして撫でつけ、浅黒い肌で眼窩の落ちくぼんだ、みすばらしい男だった。一見して賊とは思えない脆弱な印象の中年の男。だが……レーナはその特徴が、町長から聞いたその男の特徴と一致していたことに気付く。

「……」

レーナが答えないのが気に入らなかったようで、彼は彼女の顎を無理に指でくつと押し上げた。彼女は反抗的な眼差しを向けて睨みつける。部下たちによって何度となく殴られた頬は赤くはれ上がり、うつすらと血を滲ませて火照っている、額は汗で栗毛の髪を湿らせ、哀れな少女をいよいよ艶っぽくみせていた。

「言え。さあ」

男は黒々とした葉巻を吸うと、レーナの顔を汚すように煙草を含んだ灰色の息を吐きかける。レーナはたまらず顔を背けるが、その様子を見て嘲る。歯並びが悪く、金歯が醜く輝いていた。

「俺の顔をよく見ろよ。見ればわかるだろう、俺がクロイツァーだと」

部下たちもつられて、蹴られる少女にゲタゲタと、彼女の正義を蹂躪するように噛みを浴びせかける。しかし彼女は彼がクロイツァーだと分かってなお、接近していた彼の顔に唾を吐きかけた。彼女の表情からはもう、恐れは去っていた。

「薄汚い顔を近付けないで」

彼女は強い口調で言い放つ。それは彼女の精一杯の抵抗だったのかもしれない。彼は吐かれた唾液を指先で拭い、ひと舐めた。ほのかに、少女の血の味を含むそれを。

「可愛いねえ。お前はいい素材になりそうだ」

「……素材？」

彼女がふと視線をあげたので、満足そうに血走った目を眇めた。

「コンパウンの素材だ。人間のコンパウンを見たことがないのか。なかなかいるものだよ。もっとも……軍の生体兵器となるか見せ物となるか、あるいは迫害されるか。この三択、あるいは全択しかないのだがね」

彼は一つ一つ指を折りながら、彼女の反応をたつぷりと愉しむ。

コンパウンにされた人間には、悲惨な運命が待っている。元に戻すべしは残念ながら存在しない。腕の良し悪しに関わらず、コンパウン合成のエキスパートであるアルケミにも不可能だ。

「これを見るよ。遺跡で発掘された文献をもとに作ってみたんだが、どう思う？」

クロイツァーは腰のポケットに手を伸ばし、小さなアンプルを摘み出す。IVRTA (In-Vivo Rapid Transgenic Accelerator: 生体内遺伝子置換促進剤)。コンパウンを作成するには多くの方法があるが、そのひとつ、最も迅速かつ不可逆的な方法。RNAウイルスベクターをベースとした遺伝子置換剤だ。

IVRTAを粘膜や創傷面より接種すると、合成ウイルスはリンパ球へ感染する。感染した細胞はRNAゲノムを逆転写酵素で宿主ゲノムに組み込み（インテグレート）、ウイルス生産細胞へと変貌させる。T細胞より産生されたベクターはたちまちのうちに血流に乗り、抹消系から全身の細胞に送り出され、子ウイルスが遺伝子の書き換えを行う。ランダムに遺伝情報を書き換えられてしまえば、砂に紛れた砂粒を探し出そうとするも同じ。

二度と元には戻せない。

一度投与されたが最後。遺伝情報はベクターによってランダムインテグレーションを起こし、その後数日をかけ、細胞分裂速度依存的に人から異形へと変貌する。

IVRTAが残酷なのは、ウイルス宿主である感染者が死亡せず人間性を失うこともないという点だ。生体防御機構としての血液脳関門によって粒子の大きなウイルスは排除され、脳だけは人間のそれとして保存されている。異形となった身体の中に、人間としての自我は残る。自由を、そして言葉を失っても、心は人間のままだ。そして……身体はやがて、思うように動かなくなる。

「ペットに、丁度いいかもな」

クロイツァーがぼつねんとそう言えば、レーナの身体を力づくで戒める彼の側近が下劣な嗤い声を上げる。レーナの背筋が恐怖に大きく震えた。

「どんな姿になるかわからん。変異の入りようによっては命を落とす。生き延びて、人の言葉を失ったらじつくり可愛がって調教してやろう。俺の傍を離れては生きられないようにな」

クロイツァーはアンプルの口をパキンと割り、炭素素材のダガーナイフの切っ先で彼女の首筋をいやらしく撫で上げる。彼女の素肌

に鋭利な刃で傷をつけて、IVRTAの侵入経路をつくるのだ。合成ウイルスは休眠状態と活動期を繰り返しながら宿主の体内で爆発的に増殖し続ける。ウイルス増殖を抑制するためには、生涯にわたって抑制剤を飲み続けなければならない。そして彼女の生命線は、クロイツァーに握られる。

「……さ、最低。どうして、こんなことを」

絶望したレーナの瞳から涙が頬を伝いとめどなく零れ落ちる。どうしてたった一人の腐りきった人間のために、レーナの家族や街の人々、そしてレーナ自身が犠牲とならなければならなかったのか。何が悪かったのか、何の罰を受けているのか。

「どうしてと訊かれても困るな、どうしてだろうね。理由があるとしたら、人間という生体パーツ素材への純粋な興味かもしれない。コンパウンのベースに人間を使ったら面白いモノができる、ただそれだけだ」

感情を欠落した男の言葉はレーナの背筋を凍りつかせたと同時に、周囲を取り巻いているクロイツァーの手下たちにも改めて恐怖心を植え付ける。

「変異はランダムなもので、どんな変異が起こるのか愉しみだ」

「あなたは間違ってる！ 何でも思い通りになると思ったら大間違いよ！ 絶対許さない！ 私の大切な街も家族もズタズタにしたあなただけは！」

振り絞るような声で、彼女は気丈にもそう言い放った。これは彼女の、最初で最後の抵抗となるかもしれない。

「許さなかったら、どうするって？」

「例え化け物にされても絶対、あなたの思い通りになんか……なつてやらない！」

抵抗する彼女に構わず、二人の手下が彼女を無理やり押さえつけ、

後ろ手にして跪かせる。不心得者で凶暴なクロイツァーの部下たちが殆ど丸腰のクロイツァーと手を組み行動を共にしているのは、最初はコンパウンの存在によって民間人から効率よく金品を巻き上げることが目的だった。

だが、クロイツァーによつて共同の飲み水に毒薬を盛られたがために、体内に毒物という爆弾を抱えている彼らは解毒剤に依存し、定期的にそれを服薬しなければ生きてゆけなくなった。解毒剤はクロイツァーから数日毎に手渡され、手柄のない者、気に入らない者には渡されない。彼らはクロイツァーと手を組んだというだけの関係から、強固な主従関係を結ぶことを強いられた。また、彼の機嫌を損ねると理不尽にコンパウンの素材にされる。

「いいねえ。もつと強がれよ、そそられる。すぐに俺に媚びた甘つたるい声を出すようになる」

「い、いやっ！」

クロイツァーは彼女の素肌にナイフを当て軽く引き柔らかな皮膚を裂くと、肩からじわりと鮮血が滲み出す。その様子を、部下たちは制止することもなく見守っている。そんな目に遭っているのが自らでなくてよかったと、内心では安堵しながら。

彼がアンブルの溶液を彼女の傷口に傾けようとしたとき、音速を超え飛んできた黒い礫がクロイツァーの側頭部のすぐ傍を掠めていった。彼は手元をくるわせ、アンブルは地に落ち割れ砕けた。アンブルに充填されていたIVRTAが染みだし地に吸収される。壊れた黒い双眼鏡が、彼のすぐ近傍に転がっていた。

ほどなく、三日月を背に高い塔の上から女のシルエットが飛び降りてくる。何事かと見上げた手下達が木の葉のように薙ぎ倒され、あるいは吹き飛ばされ、地響きとともに土煙が舞い上がる。状況が把握できないレーナも、傷の痛みに堪えながらつられて顔を上げた。

「デ、デイズ？」

レーナは驚いた顔を向けている。彼女を拘束していた二人の部下が拳銃を抜く前に易々と蹴り倒され、レーナはデイズに助け起こされた。月光に照らされ凜として、黒いスーツを纏った彼の姿がそこにはあった。

「よく逃げなかったな、お嬢ちゃん。格好良かったぜ」

彼女の頭を優しく撫で、デイズが先ほどレーナから借りていたハンカチを裂いて、それで肩口を縛り、手早く応急処置をする。彼女は喜びに唇を震わせ顔をくしゃくしゃにしてデイズに抱きついた。極度の恐怖と緊張から解放され、堰を切ったように泣き叫ぶ。だが、感動の再会を果たしている余裕はなかった。

「怖かったか。下がってなよお嬢ちゃん。あとは……」

デイズは先ほど、屋根と屋根の間を疾走していた間にクロイツァーとレーナの間に交わされた遣り取りを耳にしていた。怒りは沸々と、やがて奔流となって人造のシナプスを灼きつける。クロイツァーにとって、周囲の人間など彼の快楽と満足のための道具に過ぎないのだ。

同じアルケミであって、こうも違うか――。

デイズはクロイツァーを憎むと同時に、彼のマスターに感謝することを忘れなかった。彼女の手によってデイズが造られたことを……もしデイズがクロイツァーのような男に創造されていたなら……人の心も痛みも識ることなく、嬉々として殺戮を愉しんだのだろうか。悪夢のような疑問を払拭する。そのため……。

「俺がケリをつけてやる」

chapter 4 (前書き)

最後の次話の投稿日は、物語に合わせて水曜日の0時となります。

chapter 4

昂ぶる怒りを抑えつけ、滾る思いを叩きつけた。

レストランで依頼内容を聞いた時は梃子でも受けるものかと思っていたが、今は違う。彼女と、そして街の人々の心意気と覚悟に報いなくてはならない。レーナは悔悟し、クロイツァーの脅威に正面から立ち向かった。彼女の行動を見届けたいま、彼女は力を貸すに値するだけの価値を持っている。だから彼は彼女を救う。

不転の決意の、弱き者たち。彼ら導くため、一人のアルケミが具象化した願い。

それが彼というモノ創造物なのだと、彼はこれから実証すると決めた。

「片腹痛いわ、格好つけやがって。何が“お嬢ちゃん”だこの小娘が！ 笑死させる気か！」

「助けにでも来たつもりか、お嬢ちゃん？」

「こいつ。いい腰してやがる……堪らねえ」

クロイツァーの部下たちがデイズを指差して嘲笑し、あるいは獲物を狙う視線をデイズに向ける。

「誰とは知らんが、一体何をしにきた。折角のアンブルを地面に吸わせてくれたな。高くつくぞ」

クロイツァーは部下たちが騒ぎ立てるなか、ゴーグル型アナライザを再度装着して頭部を保護し、貴重なアンブルの損失に憤慨している。

「何をしに来たって？ 潰しにきたんだよ。お前らちいとはかり、やりすぎた」

「頭の弱いバカ女が、この状況で何をほざく」

スーツに身を包んだ彼の外見は女性にしか見えないのだから、男性視点のデイズの発言は奇異にとらえられることだろう。

「馬鹿はデメエだ、さっさと来い！」

デイズはクロイツァーの手勢を前に、斜に構えて挑発する。お嬢ちゃんがお嬢ちゃんを助けにきた、お涙頂戴のエピソード程度にしか思っていないのだとしたら……大火傷をしてもらわなければならない。外見だけで見くびられていることもまた、腹に据えかねる。

「身の程知らずのクソ女を鬬り殺し、八つ裂きにしろ！」

クロイツァーは部下にデイズの殺害命令を出すとともに、ヘッドギアを介しコンパウンにもコマンドを発する。基本的には非人間ベースのコンパウンに言葉は通じないので、使役者がコントロールしやすいよう神経系にコントロール用の微弱電流回路とソフトウェアが埋め込まれ遠隔制御され、クロイツァーのコマンドを受けコンパウンは自在に操縦される。

「やれるもんならやってみやがれ！」

デイズは隙をついてレーナを安全な路地裏に逃がすと、手近で発砲しようとしていた男の頸を絞めて意識を落とす。見ると防弾チョッキを着ていたのでそのまま男ごと銃撃を防ぐ盾として利用し、銃弾の雨をかくぐり駆け抜けながら敵を殴り散らしては司令塔のクロイツァーに近付いてゆく。

デイズがクロイツァーを近い間合いに捉えた躍りかかったとき、禍禍しく巨大な影が行く手を阻み、彼の内臓を一突きにせんと硬質の尾が繰り出された。

彼は苛立たしげに舌を打つと硬い尾の攻撃から身を翻し、横に大きく跳びステップバックする。すぐ傍を過ぎ去った尾を踏み台にしてコンパウンの背を駆け上がり、回転蹴りで頸部をへし折れば、視界を失い制御系を狂わされたコンパウンは周囲の部下を手当たりしだい巻き込み、暴走をはじめた。

デイズは俊敏な身のこなしでコンパウンの攻撃から回避し、ヒットアンドアウェイを続けながら、コンパウンの構成をつぶさに観察していた。

頭蓋形や上下顎、体表皮から判断するに爬虫類がベースとなっている。サソリのそれを彷彿とされる分節した硬い尾を持ち多脚類の特徴を持つ。機動性と強靭さを兼ね備え、人間が攻撃を喰らえばひとたまりもない。

分析をしていると、休む間もなく新たなコンパウンがデイズに襲い掛かる。彼は二匹のコンパウンを引き付け誘導するかのように壁を駆け、単調な動きを追わせ、急転回しコンパウンの動きを攪乱し、部下たちの銃撃をかわしつつ弾道をコンパウンに向けさせ同志討ちをさせる。最初の戦況は不利だったが、薄皮をはがすように着実に、少しずつクロイツァーの部下たちの頭数と戦力をそぎ落とす。

デイズは息切れもせずトップスピードで疾走し続け、驚異的な跳躍力で壁から壁へ飛び移る。重力を断ち飛び石を踏むようにコンパウンの頭部を蹴り潰し、的確に急所を狙いながら一体一片片付けてゆく。

彼の戦術をヘッドギアで解析しつつ多角的に捉えていたクロイツァーは、興味深そうに観察していた。

「おい……本当に人間か？」

彼が発揮した離れわざの数々と、切れないスタミナ。

光入射角によってスカイブルーからエメラルドに偏光する、澄明で人工的な瞳の輝き。サーモグラフィに映り込んだ彼の体温の不思議な熱分布。二酸化炭素を排しない、極限にまでエネルギー効率化された身体。体内循環している筈の、血流が殆ど見られないこと。

そのときデイズの手の甲に、手下の一人が放った弾丸が命中し貫通した。クロイツァーが注視していると彼の皮膚には一瞬銃創ができたが、血液を流すこともなくすっと塞がって消えた。彼は最初か

ら苦痛すら感じていないかのように、神速の蹴撃を繰り出す。一瞬にして隠匿された証拠を目撃した途端、クロイツァーは驚愕し喚いた。

「エーテラーか！」

「エ、エーテラー？」

路地裏に隠れていたレーナもクロイツァーの言葉を聞いていた。素手で立ち向かうデイズを一人残し、傍を離れることがしのびなく、かといって加勢するにも非力な彼女は、彼の勝利を祈りながら物影から見守っていた。

「まさかあのエーテラーに会えるとはな！」

クロイツァーの声は興奮にうち震えていた。全てのアルケミが目指した究極の創造物があつたとすれば、それは全き人間の創造だ。エーテラーとは、ゼロベースから創造された人造人間を意味する。DNAを持たない、試験管内で創造した有機・および無機化合物の複合体に自我を持たせること。それは神の領域に踏み込んだ、禁断にして至高の試みだった。

「間違いない……ガールランド帝国のエーテラー。そうだな」

ガールランド帝国は遺跡の発掘が盛んで、アルケミのスキルも総じて高度だと前々から言われていたが――。古代技術を復古させた技術の震源地に、金髪碧眼の両性具有型エーテラーが密かに一体運用されている。クロイツァーはそんな噂を耳にしたことがあった。両性具有なものにも、生殖能力を持っていないのだから言葉の用法は正確ではないのだが、とにかく、かのエーテラーの外見は女性に見えるよう。彼の知りうる情報と、目の前にいる人物の特徴は完全に一致していた。

「だとしたら？」

デイズは声のトーンを落とし、首を絞められ意識を失った男を手放した。心なしかクロイツァーの耳には彼の声が中性的に聞こえる。あまりに澄みきった双眸が冷たい光を湛えて鋭く輝く。

「決まっている。エーテラーをほしがらないアルケミがいると思うか。抵抗せんなら生け捕りにしてやるが。この際、生死は問わんよ。記憶を書き換え、再稼働すればいいのだからな」

クロイツァーはそう言うが、どいつもこいつも同じだ、とデイズは舌打ちをする。希少なエーテラーの存在価値を考えれば、クロイツァーは喉から手が出るほど手に入れたがっているのだらう。デイズはというと、画一的なセリフ回しに、心底辟易する。そして彼は、何人が自分を手に入れようとしてそんな言葉を吐いたか、正確に記憶している。彼は確かにモノとして創られた、だが彼は共有物ではなく、誰にでも所有されるわけにはいかない。デイズがこの世でただ一人、主と認めたのはオフィーリア、ただ一人だ。

「デメエで二十四人目だよ。そのセリフを吐いたのは」

エーテラー一体を開発するコスト、時間、必要とされる技術水準は莫大なものとなる。エーテラーを完成させたと公式に各国に認められているのは、デイズの主を含め四人しかない。そして彼らが創造したエーテラーのうち、長期にわたって現在も安定的に稼働、運用されているのはデイズだけだ。

一分子から有機合成によってエーテラーを創造する過程には、無数の手技的なエラーが入る可能性がある。また、疑似精神系、疑似脳、情報ネットワークを構築する過程は困難を極め、アルケミの技術力だけの問題ではなく、運に任せざるをえない合成経路もある。したがって人間の形をなしていても思考回路に不具合があったり、

思考能力が伴わないことが殆どだ。その原因、寧ろ敗因は判然としていた。

人造人間を創出するためには何よりもまず、人間が何たるかを知り尽くさなくてはならない。一遺伝子、一タンパク質の制御から、自我と心理の構造理解、制御に至るまで。人間の脳機能が医学的に解明されていないなかで、デイズの主はいかなる手段を用いてか、エーテラー合成を完璧に成し遂げた。彼女がデイズを創造するために開発し秘匿した技術は、アルケミ達にとって未だ乗り越えられないブラックボックスを、そして人間と人造人間との差異を限りなく、ゼロに近付けたということを示唆していた。

完全なるエーテラーの合成の一報は、風の噂に乗って大陸全土に広まっていったものだから、おかげでデイズの秘密を暴き手に入れようとする輩にデイズがつけ狙われるのは必至だった。

デイズを合成した際に当然完成されたと思われるスキーム化学合成経路を売ってくれとオフィーリアに大金を積んだもの、実力行使で彼を奪い去ろうとして敢え無く彼に返り討ちに遇ったもの、彼の身体を隅々まで調べさせてくれと身体を触ろうとして殴られたもの、寝込みを盗みに入ろうとしたものなど……。散々な目に遇ったものだ。

彼らの試みも空しく、デイズを合成したスキームと神経ネットワークの回路図が世に出回ることなかった。オフィーリアは同型のエーテラーを量産することを望まなかったし、研究者気質であったため金儲けにもともと興味がなかった。万が一量産されるようなことになれば、利用方法は目に見えている。――軍事利用だ。

「そうか、悪かったな。だが俺が最後だ……やれ！」

クロイツァーは強い口調でコンパウンに命じたが、コンパウンがそれにこたえることはなかった。デイズに襲いかかるものは何もない。彼の部下たちはいつの間にか全員、片付けられて気絶し、コン

パウンは破壊されていた。デイズは哀れむように彼らに上からの視線をくれ、不敵に笑う。

「それを誰に言っている？」

壮観だね、とデイズはほくそ笑んだ。

ゆつくりと背後を振り返ったクロイツァーの目に飛び込んできたのは、シニカルな光景だ。そう。追い詰められた“彼ら”の復讐は密かに始まっていた。

デイズの呼び声に触発され蜂起した住民たちが武器を手にもえ、クロイツァーを完全に包囲していた。デイズがクロイツァーの目を引き付けるように派手に暴れていたので、武装した人々の接近が気取られなかったのだ。直線道路にずらりと居並んだ即席の自警団もどきは、覚束ない手つきで銃を構え、最前線は移動砲台の砲身をクロイツァーに向け、各々引き金を引こうとしていた。

後方には、痩せた壮年の男の姿をみとめる。指揮を執り、声を上げる町長の姿があった。そうか。町長も残って戦っているのか――デイズは意外そうに目を丸くしたが、何か納得したように微笑んだ。デイズが街の人々を率いて敵を切り崩しているとの情報を得て、町長の考えは変わったのだろうか。一般人が逃げることなく戦う中を、町長が尻尾を巻いて逃げたとあらば、とんだ汚名を着せられ、町長の座も危ういと踏んだうえのことか……それとも彼が、純粹な義心に立ち返ったのか。デイズは後者だと信じたかった。

理不尽に齎された災禍の憤懣をぶつけるべく、覚悟を決し……人はそうあるべきだとデイズが信じていたかったもの。立ちあがる勇氣はあるかと、彼が一人一人の胸に問いた。まさにその答えを、彼らは示したのだ。

彼らの手によって、水も漏らさぬ包囲網が既に、完成していた。

家を、そして家族を奪われた住民たちの気迫にクロイツァーが気圧されて一瞬怯んだのを、デイズは見逃さず叫んだ。

「一気にたたみ込め！」

「主砲、銃火器斉射！」

町長の掛け声とともに、包囲した街の人々は勇壮な雄叫びと共にコンパウンに銃弾の雨を浴びせ、完膚なきまでに刻み込んだ。放たれた銃弾はコンパウンの硬い表皮を貫く。建物の上からも数名、銃を放って援護射撃をしている。素人の集団だが、銃火器の物量にものをいわせ戦況は優勢に傾いている。

この分だとどうやら奥の手を使わずに済みそうだ。彼はほっと胸をなでおろした。

「調子に乗りやがって！ クソがあ！」

クロイツァーは眉間に皺を寄せ歯噛みをし、懷に隠し持っていたペンを抜いた。光跡を描きながら地上に幾何学紋様を手際よくしたためる。彼が辿った跡には青色蛍光が残り、夜闇に不気味に浮かびその存在を主張する。その鮮やかなライトワークに……デイズはただのペンではないと気付き瞳を見開いた。

「オーバーウェポンか！」

オーバーウェポン（Over weapon）とは古代遺跡から発掘された文献をもとに開発された、古代のテクノロジーを用いて開発された機械の俗称だ。最初に軍事利用が行われたため、オーバーウェポンと呼ばれている。

デイズは今も禍禍しく青い光を吐きだすオーバーウェポンに見覚えがあった。

彼が手にしているものはサモンマーカーと呼ばれるもので、電磁誘導方式で入力する長距離転送ターゲットマーカーだ。使用方法は予め転送装置に入っている対象物を標的に、地面、あるいは空中に幾何学模様をした転送用の電磁回路を敷くだけだ。転送回路が開通

されると、転送装置にリンクし物理学的トンネル効果を利用して、時空を飛び越えた対象物が召喚者の敷いたポイントに転送される。その原理を知らない人々からすれば、魔方陣のように見えるだろう。窮地に立たされたアルケミが考えることだ。相当な強敵を召喚してくるに違いない。

デイズが止めに入ろうとしたときには、既に手遅れだった。転送回路は入力受付を示す励起状態になり虹色の光を明滅させ、怪物が転送されてくる。青い閃光が迸り土煙を上げ、巨大なコンパウンが実体化し姿を現した。召喚されたのは先ほどと同型のコンパウンだ。だがそのサイズは桁違いで、民家の高さを裕に越える。

「う、うああ——！」

規格外サイズの怪物の出現に、一斉に街の人々の悲鳴が上がった。辺り一帯、人々が蜘蛛の子を散らしたように逃げ惑う。

「か、怪獣だ！」

「怯むな！ 撃てっ、撃てえ！」

パニック状態となり逃走する者も数多くいるなか、砲撃手たちが狂ったように射撃を行う。だがコンパウンのサイズが大きすぎて表皮も厚く、砲弾がコンパウンの体内に届かない。クロイツァーはコンパウンに掬いあげられ頭に乗って及び腰になった人々を小気味よさそうに見降ろしている。急に弱腰になって避難をはじめた者、なおも勇気を振り絞り立ち向かおうとする者……だが立ち向かうにも限度がある。人間が戦って勝てる代物ではない、そう、人間には勝てない。デイズは声を限りに叫んだ。

「駄目だ、逃げろ——！ こいつとは戦うな！」

銃身を掲げた勇敢な街の人々に向けて発したデイズの絶叫を、あたかも敗北宣言のように聞き流しながら、クロイツァーは恍惚とした表情を浮かべる。形勢逆転だ。

「目障りなゴミどもを片付けろ」

コンパウンは巨大な尾を振り回し、家々や人々、あまつさえ彼の部下をも吹き飛ばし薙ぎ払う。デイズは街の人々に避難を促し、コンパウンの攻撃をかわし地に身を伏せたが間にあわない。殆どの建物は同心円状に全壊する。弾薬倉庫に引火し火柱が夜空を焼き、朦々と煙を上げ……。火傷を負う人々、熱風に煽られ火の粉に焼かれ成すすべなく立ちつくす者。

「哀れだねえ。だが力が全てだ」

非力なくせに口だけ達者な男の心酔を苛立たしく思いながら、デイズは彼の周囲で助けを求める人々を見捨てておけない。彼は瓦礫を軽々と押し退け数名の人々を救ったが、全員は間にあわない。少し離れた瓦礫の隙間にレーナの姿が見えた。

「おや、何かと思えばこんなところにいたか」

デイズの視線を追ったのだろうか、クロイツァーもレーナに気づき、彼女に狙いを定める。

「満身創痍だな。IVRTAの実験に使おうかと思ったが、気が変わった。マリーの餌にしてやろう。弱肉強食は自然界の摂理、こいつは食物連鎖の頂点にあり俺はこいつを飼い馴らす。最強の俺に楯ついてしまった愚かさを悔いながら、罅られ喰い殺されるがいい」マリーというのは、コンパウンの名前のようだ。あの外見の怪物にマリーなんて愛嬌のある名前をつけてペットのように可愛がつているのか、とデイズは吐き気を催す。そんなことはともかく、デイズは瓦礫から身体を引き抜こうともかくレーナを庇うように、コンパウンの前に飛び出した。

「違うねえ！」

片手を大きく広げ、彼は黒いスーツの前ボタンを外し、その裾を風になびかせ立ちふさがる。

「デメエが最強ってのは大間違いだ！ それを今から証明してやる。」

吹っ切れたよ」

デイズが叫んだ途端、コンパウンの攻撃を受け壊れかけた街の時計台の鐘がやや軋んだ音で、零時を打った。大陸標準時（LTC）で0時。たった今、この瞬間をもつて水曜日となる。^{ウェンズデー}そして彼はこのときを待っていた。彼は素手での決着を望んでいたが、そういうわけにもいかなかった。クロイツァーが怪獣のようなコンパウンで挑みかかってくるとすれば、デイズも相応の手段で迎えうつほかない。

「エーテラーの行動としては実に興味深いものだ。死を恐れないか、あるは理解ができないのか。エーテラーとて機能不全にはなるだろうに」

クロイツァーはマリーと呼ばれたコンパウンを操り、デイズに尾をけしかける。しかしその攻撃にはどこか、躊躇の色が見えた。急所を狙わない。重要な機能や制御系が集中している中枢系を狙わないところを見ると、デイズの動きを封じることのみが目的だ。エーテラーをできるだけ無傷で手に入れ、そのテクノロジーの真髄と秘蹟を暴き尽くし彼の欲望のために利用する、デイズはクロイツァーの魂胆を見透かしていた。

だが、彼の危機ではないかと気を揉んだレーナは、声を枯らせ彼の名を呼ぶ。

「デイズ、逃げて——！」

「安心しろ、お嬢ちゃん」

デイズは心配する彼女を落ち着かせるように、背中越しに穏やかに声をかけた。

「あいつの好きにはさせねえさ」

彼は表情を引き締め、何かを求めるように勢いよく片手を、満点の星空へ突き上げた。古代人が宇宙に置き去りにした7つの次世代

情報測位衛星、UNISAT-7SYに思考連動シーケンスを夜空へと送信しアクセスを試みる。UNISAT-7SYの衛星群は高度にあり、赤道上に等間隔の周回軌道を持ち360度をカバーする。必ずどれかの衛星が天球上に存在するため、随時デイズの発信に応じる。ビットレート24 Gbps（ギガビット毎秒）でビーコン通信を確立し、UNISAT-7SYからのテレメトリを受信。通信内容を暗号化し、稼働コマンドを送信する。

「こい！」

彼が全身全霊を傾け、喚んだ声に導かれるかのように。衛星測距システムによりデイズの位置を認識したそれは、上空から気圏を突破し炎を纏い稲妻のように降って地に突き刺さり、熱を孕んだ衝撃波を放つ。デイズは翳した右手で熱波を遮りレーナや街の人々を庇護したが、敵性入力されていたコンパウンには容赦なく襲い掛かり、硬い表皮を焦げつかす。

満天の星空から、大気を裂き流星となって現れたそれは、先端が大きく屈曲した腰丈ほどの、金属製の一振りの杖……セブンワークス・オブ・フェイト（The Seven Works of Fate：運命の一週間）。杖の形状が数字の7に似ていることから、デイズは略称でセブンと呼んでいる。

chapter 5

「何だあれは、流れ星か？」

「でも、あの流れ星。縦に落ちてないか？」

南西。ゼガリア大陸一の大都市アルカにて、その光は確認された。ほぼ垂直に墜ちてゆく煌めきが、人々には不可解に思っていた。

ただ一人。都市の中央区、ホテルの一室の窓際に佇む彼女だけは、悠然とその光を眺めている。部屋の灯り消した暗闇の中でもなお、月の光を受けて際立つ雪肌せつきと艶やかな銀髪。慈悲深く静謐せいひつな、しかしどこか陰のある雰囲気きんきを身に纏う。

「あれは……あの光は」

思うところがあったのか、一瞬だけ表情を曇らせたが。やがて彼女は全てを悟り、薄紅色の紅唇こうしんを微笑みに変えた。

「そう……、今日もまた。どこかで誰かを救っているのね。デイズ」琥珀色の輝きを秘めたその瞳をそっと閉じて、彼女、オフィリアは呟いた。

「デイズ。私を追って辿り着く時、あなたはもう一度。世界の終末の日から、破滅の運命から世界を救ってくれと信じているわ」
ドゥームスター

あれを、運命を止められるのは、あなたとセブンワークス・オブ・フェイトだけなのだから——と、開いた瞳を星空へと向け、彼女は切に願う。そのために、自分は敢えてさらわれることにしたのだと。遠い昔、世界は崩壊した。だが、数千年前に起きた崩壊の真実を知る者は、誰一人として存在しない。

当事者であったオフィリアを除いては……。

誰も知るはずがない。デイズがいなければ、人類はとつくの昔に根絶やしにされていたこと、それを防ぐ代償として文明が崩壊したことすらも。

デイズを生み出したのはオフィーリアだ。だが、生み出したのは
イーテラーが大量に生み出された混沌の時代。宇宙に移住した人間
と地に住む人間達は、ほんのささやかな言い争いが原因で戦争を始
めた。三年程度だったのが、永久に感じられたあの戦争。

歯止めの利かない戦いで星は、死を迎えようとしていた。人間の
造ったとある兵器によつて。それは後に兵器の名として、それが及
ぼした結果から断罪の日と呼ばれ、当日の人間達の記憶に深く刻み
込んだ。

「オフィーリア」

ドアが開き、隙間から人影が赤い瞳を覗かせた。野太い男の声共
々にそれは唐突だったが、彼女はそれが判っていたかのように、平
然とした様子で未だに星空を眺めていた。

「いつまで起きている」

隙間から覗く目は怪訝に細めて、彼女に問う。声調には苛立ちが
含まれていた。

「私がいつまで起きようが寝ようが勝手でしょ……」

ドアの方を見向きもせず。彼女はさらりと言葉を続けて返す。

「別に逃げたりしないし、ちゃんとあなた達の親玉に会いに行くか
ら安心なさい」

「どうだかな……、どちらにせよ明日は早い。我々は一刻も早くア
レを起動させたいのだ。そのためには、お前の技術が必要だ」

アレ……ドゥームズデーの事を差しているのだろう。彼女を拉致
した組織は“忘れ去られた大地”遠い昔にオーストラリアと呼ばれ
ていた土地にてドゥームズデーを発見し、回収した。組織のボスは、
オフィーリアがドゥームズデーと繋がりにあることをどこで知った
のか、起動の為に彼女を拉致してくるよう、部下にこの一言だけを
告げた。手段は選ぶな、脅しをかけても構わないと付け足して。

だが、いざ現地に赴いた彼らにとって、オフィーリアの対応は予

想外なものだった。自分から連れて行けと、ドウムズデーを見せ
てみると口にしたのだ。

これには何かの陰謀があるのではと黒服達は警戒心を強めたが、
どちらにせよこの女が必要だ。手荒に扱う訳にもいれない為、未だ
にその靄は晴れぬまま、こうして蟠りを引きずるように此処まで来
たのだった。

「私の技術がねえ……、必要ないのにね」

「何か言ったか？」

最後の科白を上手く聞き取れず男は問い掛けるが、彼女は何でも
ないと返すなり、眠りにつく口に出した。納得のいかない気持ち
を溜息にして漏らすと、男は静かにドアを閉め、外側から鍵をかけ
た。彼女を外に出さない為にだ。窓から逃げないようにホテルの外
でも見張りが付いている。

彼女はそれらを確認すると、彼らの無駄な行為に感心と呆れの溜
息を漏らして肩をすくめた。

まあ、せいぜい逃げる気のない私の見張りを頑張って頂戴——そ
んな皮肉を内に吐いて、彼女はベッドに身を預けた。

「ドウムズデーは、私がいじらなくても起動する」

それが何を意味するのか、彼女はデイズを何処へ導くのか、今は
全てが謎のまま。

デイズが彼女と出会う時、それは解き明かされるのだろう。

静かに、暗闇のなかで彼女は瞳を閉じた。

彼との再会を信じて——。

突然の出来事に驚愕するクロイツァーの額を、ぽつりと水滴が打った。砂漠に降りしき、砂地を濡らす場違いな雨粒。もつとも不可解なのは――周囲には水蒸気が、存在しないということだ。ただし若干の肌寒さを感じる。

「な……何が起った!」

最初は小雨、次第にスコールへ。雨脚は徐々に強まってゆく、上空に雨雲はなく澄み切った月は光を地上へ投じ、影を落としていた。コンパウンが派手に家屋を破壊したために出火し、燃え盛っていた炎はたちまちのうち鎮火する。

何だ、何が起こっている。デイズが握る杖はシンプルなデザインで、特に武器のようには見えない。杖を使って、何か小細工をしたのだろうか？ 状況を把握できないクロイツァーに焦りの色が滲む。

「なぜ雨が降ってきた」

「降ってきた？ 偶然じゃねえ……降らせたんだよ」

揺ぎのなく、落ち着いた声でデイズは応ずる。

彼の言葉がハツタリでなく事実であると証すかのように、彼が空中で杖を大きく廻すとぱたりと雨は降り止み、あたりは静けさを取り戻す。クロイツァーは顔を歪ませた。

デイズは神経系と強固にリンクしたエレクトリックフィールド微弱電界をその身に纏っている。このセブンワークス・オブ・フェイトはデイズの思考回路を電界のシグナルで強弱のシーケンスより読み取り、彼が素手でセブンに触れてデータ送信を行っている限り10Mbpsの双方向通信を介し、如意に操ることができる。

何やら“吹っ切れた”と言っていたが、オーバーウェポンにはオーバーウェポンで、というわけか。クロイツァーは唇の裏を噛みしめながら、デイズの隠されたポテンシャルに驚きを隠せない。

「天候を自在に操るほどのものは見たことがないが、お前には過ぎ

たものを持っているな」

「一人旅にはこのくらいVIPなのが丁度いいんだ」

彼は杖を振り回し、洗練された所作でクロイツァーに指し向ける。「それにテメエは勘違いしている。セブンは天候を操るような、そんなモノじゃねえんだよ」

それを端的に言ってしまうえば、24時間ごとに属性変化を起こす特殊なオーバーウェポンだ。杖の表面を走る回路が24時間ごとに自動的にスイッチされることによって、内部プログラムが切り替わる。そのシーケンスは曜日になぞらえてあるように思われたため、最初にセブンを起動した際、マスターはデイズが扱いやすいように現実世界の一週間と大陸標準時とリンクさせ同じ間隔でスイッチするようセットアップした。

今日は”水”曜日。

見かけはただ、降水を操作しているように見えるかもしれない。だがその本質は、水素、及び酸素結合力を局所的に操作することだ。これもセブンの膨大な機能のうちのほんの一つだが、クロイツァー相手に全力で挑むまでもない。元来このオーバーウェポンは、武器として利用すべきではないのだから。

「やれ！ マリー」

「マリーってツラかよそいつ。悪趣味だな……しっかりと掴まってる、お嬢ちゃん」

彼は瓦礫の中からレーナを助け起こし軽々と抱きかかえると、セブンを通じて対地斥力を発し、跳躍力をアシストする。彼は水平に握ったセブンを腰のあたりに固定して寄り掛かり、レーナの体重などものともせず、軽く地を蹴り空に舞い上がる。入れ違いに、デイズとレーナの留まっていた場所はコンパウンの尾によって深く抉ら

れクレーターがあく。コンマ数秒遅ければ……、レーナは無残な残骸を見て、顔を伏せ思わずデイズに抱きついた。

彼はレーナを安心させるようにきつく抱きしめたまま上空からコンパウンを俯瞰する。背の下を、生ぬるい風が吹き抜けていった。腕の中にある彼女の身体は、小刻みに震えている。その鼓動と体温を、生を知らない彼は余さず感じていた。

「馬鹿が、跳びやがったな！ 空中なら回避はできまい、終わりだ！」

勝機とばかり、クロイツァーはレーナもろともデイズを突き上げるようにコンパウンの尾を繰り出す。空を切り、二人を刺し貫こうと唸りをあげる凶器は、すぐ目の前にまで迫ってくる。だがデイズは怯まない。

「はつきり言っておくが、馬鹿はデメエだ」

攻撃を仕掛けてきたコンパウンは、近い間合いから直ちに防御に転じることができない。それをデイズは見抜いている。彼はコンパウンの攻撃から逃れるため否応なく跳躍したのではなく、このポジションに尾を向けさせるために跳んだ。クロイツァーの真上の、その座標へ。

彼はセブンを強く握り締め、無言でコマンドを与える。杖状装置に埋没されたサファイア色の晶石へリンクする回路が応答し、オーダーを受け付けたことを示す。久しぶりに振るう繊細な機巧は、デイズの意を愚直なまでに従順に、そして確実に汲んでいる。頼もしいシーケンスの一つ一つを確認しながら、デイズはオーバーウェポンに意思を通じる。

自由落下をしながら、彼は杖で足元に輪を描く。撫でられた領域の大気中の水素が水素結合を起こし、水環が出現し瞬く間に展開する……。

アクアメビウスリング。

圧縮された水分子が杖から発せられる局所的かつ強烈な電磁場によって歪曲され、メビウスの輪のような構造をなす。進る水流は磁界によって加圧され、380メガパスカル（MPa）の水圧を内包している。砂漠地帯なので大気から抽出した水量が不足しているものの、片をつけるには充分すぎる威力だ。

デイズが杖を振るうとアクアメビウスリングは歪んだ水環をうねらせ、研ぎ澄まされた水刃の波が綾となって眼下に輝く。マリーと名づけられた特大コンパウンの尾は彼が空を凧ぐたび幾度となく切断され、茶褐色の漿液が噴き上がった。

彼は水刃を更に加圧すると、メビウスの輪は遠心力によってほどけ円環になる。彼は水環の裡をすり抜けながら水のループを防御陣として軽やかに身に纏わせ、コンパウンの頭上めがけ垂直落下する。

「じゃあな、マリーとクロイツァーだったか。今日がテメエの――」

デイズがすり抜けざまに放ったウォーターリングは、コンパウンの頸を鮮やかに刎ね落とした。コンパウンの頭部に載っていたクロイツァーの身体がぐらりと傾き、敢え無く放物線を描き宙に放り出される。

「The Day of the line（最後）だ！」

デイズは足場を失ったクロイツァーの脳髓を杖でしたたかに殴りつけ、ヘッドギアを粉碎する。破碎された破片が結晶となって舞い散る中、間髪いれず彼の喉輪を取り片手で鷲掴みにすると、十メートルの高さから地上に激しく叩きつけた。背から地表に沈められたクロイツァーはビクンと痙攣し白目を剥き、泡を吐いて動かなくな

った。

瀕死の状態ではあるが、デイズが手加減をしたため命までもは奪っていない。痛みを知らなかったその身は、初めて受けた苦痛の味を知る。先ほどまで自身を最強と称し奢っていた哀れな、か弱き男は苦悶の表情を残したまま、いとも簡単に意識を手放した。

「さて、どうすべきだ」

とどめを刺すのかと思いきや、彼は握り締めていたクロイツアーの喉元からふわりと手を離しレーナに問う。レーナは身体を仰け反らせ、目を見開いた。

「え？ ……何故」

「俺がエーテラーだって、聞いてただろ？ 精神系にリミッターがかけられていて、人を殺せないようになってる」

ここに、と彼はスーツのジャケットを肩に羽織り、こめかみのあたりを人差し指でさした。彼はモノであるから、人を殺してはならない。但し、自己防衛による結果が死亡の場合は例外とする。それは彼の脳に最初に入力されていた命令であり、彼を縛る原始的なオーダーであった。すべて人を殺傷する能力を持つモノには、最低限の安全装置が組み込まれるのが原則だ。銃もしくり、爆弾もしくり……。殺人兵器としても稼働されうるエーテラーに与えられる最初の制御系は則ち、人に害をなしてはならないということ。

レーナは辺りを見渡す。そうか……。瓦礫の下に眠る死者はクロイツアー操るコンパウンによって犠牲となったものたちであって、彼は奇跡的にも言うべきだが人間を殺してはいなかった。そして彼女はデイズに訊ねられ、無意識のうちに、自らの手を汚さずクロイツアーを殺害することを望んでいたことを思い知らされる。

「人が人を殺せと命じない限り、俺はコイツを殺せない。だからもう一度あんたに訊く」

翡翠色に澄み切った瞳は、玲瓏なる輝きを保ちながらレーナを見

据えている。彼女を試すかのように。

「こいつを殺すのか」

そこに倒れているのは、レーナの愛する家族を奪い尽くした男だ。彼女の全てをめちゃくちゃにした。彼女が頷いて肯定するだけで、たったそれだけの行為で復讐は遂げられる。目には目を、歯には歯を。死を以って、死に報いる。それで確かに、レーナは復讐を遂げられるかもしれない。だがデイズが手を下してもレーナが撃つても後に残るのは何もなく、あるとすればそれは空虚感だけだ。彼の言葉は、あるいは問いかける。

「躊躇してるのか。人がモノを使って、人を殺す。ただそれだけの話だろ」

彼はさもつまらないことのように、そう言って捨てた。デイズのリミッターを解除してでも殺せと命じることと、銃の安全装置を解除してトリガーを引く事は、何も変わらないと彼は述べる。他人任せの判断ではなく、自らの決断で命を奪うかと、デイズは訊ねているのだ。

「私は……」

レーナは押し黙っていた。俯いて躊躇いを見せていた。

長い長い沈黙が続く。蒼白の月が雲から顔を出して、静けさを漂わせる大地を照らし始めた。彼女が顔を上げたのはその時だ。擦り傷を負っている白い肌が光を受け、強く意を決した表情がそこにあった。

なるほどな——と、デイズは返事のないレーナにどこか安心したように、杖を軽く上空に振り上げ皮肉っぽく微笑むと、背を向けた。

「まあ……このままでも、大して結果は変わらないのかもな」

上空で制御を解かれたアクアメビウスリングの水滴が、名残雨のように倒れたクロイツァーの上から降り注いでいた。降り注いだ水滴は、クロイツァーのコートに白く穴を残し、無防備な皮膚を腐蝕させている。また、墜落した衝撃によって割れたクロイツァーの胸ポケットのピルケースから、IVRTAの青い液体が傷口を介し彼の体内へゆつくりと侵入をはじめていた。

デイズがクロイツァーに浴びせた雨水は、大気中の水素と酸素から抽出したが、実は純粋な水ではない。水のように無色透明に見えて一定の確率で一原子ずつ、余分な結合を含ませた。それは酸素だ。したがって過酸化水素の雨が、残酷にクロイツァーを打ちのめす。彼の皮膚で起こっているのは、緩慢な酸化反応。やがてじつくりと始まるIVRTAによって誘発される変異を生きて耐えたとしても、火傷を負った身ではすぐには動けまい。

何よりクロイツァー、彼自身が知っている。IVRTAによって彼の身に齎される変異は不可逆的であり、助かるすべはないのだともはやクロイツァーがアルケミとして再起する術はなく、かつて人間であつた哀れな怪物は絶望に打ちひしがれながら灼熱の砂漠を彷徨い、運が悪ければ力尽きるのだろう。

これまでの所業の全てが、跳ね返って彼を苦しめる。そのとき彼は、彼の残虐な行いを悔悟することとなる。

敢えて、それ以上手を下すまでもない。レーナが顔を上げた。明星が沈む満月へと、寄り添うように瞬いていた。

翌々日、デイズは朝焼けの街、朝霞の中を立ち去ろうとしていた。昨日は、瓦礫の下にいた街の人々の救助に腐心した。ぜひ大々的にお礼の席をもうけたいと申し出た街の人々の厚意をすっかり無碍にして、一人旅立つためだ。

西側エリアの小さな裏口、その先はまばらな草原が広がり、緑が陽光を受けて眩いばかりだ。

そこから伸びる一本道を行けば、隣国に着くだろうと教わった。町長からたつぷりと礼金を受け取り、レーナからは買いそびれた地図を受け取った。この地に思い残すことは何もなく、皆に惜しまれる別れも得意としない。それに旅立ちに見送りと惜別が必要なのは、人間だけだ。彼はそう思う。

だが、石造りの街門には思いがけず、清楚な白いワンピースを着たレーナが待ち伏せて座っているのが、遠目に見えた。うつらうつらとして、夜明け前から長い時間、彼を待っていたということが分かる。デイズが近付くと彼女は目を覚まし起き上がる。一度ならず二度までも、彼女に裏を読まれて見つかったのか、と彼はきまり悪そうに頭を掻いた。

「勘がいいんだな。恐れ入るよ、どんなセンサーを持ってるんだ？」

女の勘はセンサーのようなものだ、彼は不思議だ。

「おかげさまで。もう行っちゃうのね、もっとここにいてって、昨日あれほと言ったのに」

「のんびりしてるわけにもいかないんだよ、実際。こうしている間にも……」

デイズの大切な人がさらわれて、助けを求めている。急ぎ往く旅路の途中だ、ここで数日足止めを喰らった分、遅れを取り戻さなければならぬのだと、そういえば彼はレーナに説明していた。そんな事情を思い出したレーナは、彼がいかに貴重な時間を割いてくれたかと分かり、申し訳なさそうな顔をした。彼もまた彼の荷を負っている。

「そっか——。じゃ、その人のためにも早く行かなきゃね。ねえ、デイズ……、いつもこんな感じで旅をしているの？」

今回のようなことは、今にはじまったことではない。

「はは、まあな。何故かいつも、こうなってるね」

面倒ごとには関わりたくない、そつなく物事をこなしたい。彼は常にそう願っているが、いざ困っている人々を目にすると彼らにドライに接することができず、進んで厄介事に巻き込まれてしまう。それは迂遠で非効率的なことだと分かりきっているのに、どうしてもだろうと、彼はいつも考える。だがこれは、どれだけ考えても判らなかつた。そこで最近では、そういう仕様に創られたエーターなのだと、思い込むことにしている。そんなアルゴリズムは、存在しないと思うのだが。

ふと、彼はレーナの行く末が気にかかった。

「お譲ちゃん、身寄りはあるのか？」

レーナは、家族全員をクロイツァーに惨殺され失った。その悲しみが癒えるまでに、どれほどの時間を要するだろう。そして彼女が自立してゆくまでに、まだ暫く時間がかかりそうだ。

「うん……何人か親戚はいるから。でも、すぐには乗り越えられない……癒えるには時間がかかるわ。それに、あんな怖い奴らがまた来たらと思うと……」

弱音を吐こうとするレーナの言葉を、元気づけるように遮った。

「大丈夫、あんたはもう強い」

彼はレーナの両肩に置いた両手に力を込め、そう言い聞かせる。朝陽に反射した彼の偏光する蒼い人工の瞳は、完全なまでに透き通っている。その瞳の奥を潤んだ眼差しで覗き返しながら、レーナは力強く頷いた。彼女はこんな言葉を添える。

「ねえ、デイズ。あなたは他人に無関心だと言ったけれど、私は違うと思う。あなたのおかげで私や皆も救われたの、そして今も救ってくれてる。だから」

彼女は微笑んで、宙ぶらりんになった彼の手を両手で取る。

「そのままできてね。これからも」

デイズはぎょつとした顔でレーナからのけぞり、いつもの癖で、頭をバリバリとかく。

「変わらねえよ。そういう性分——というか、たぶんこれは仕様なんだ」

「私は仕様なんかじゃないと、思うけれど」

彼が取り戻したものは、街の平和だけではない。人間の本質に立ち返らせ、街の人々が忘れかけていた心をも取り戻した。揺るがぬ信念を持った、されど人にあらざるもの。彼は人間そのものだ、レーナは心底そう思う。彼はレーナからの熱い眼差しに困った拳句、ファジーなアルゴリズムはよく判らないので苦手だね、と自嘲するにとどまった。

「じゃあな、レーナ」

彼は素っ気無くそう言うと、踵を返し立ち去ったが、彼女は、彼の言葉の端におまけのようにつけられた人称の変化に気付く。彼はこれまで、一度とてレーナを名前で呼ばなかった。別れ際にようやく名前を覚えてくれたか、もしくは何か心境の変化あったのか。一人前の女性として認められたような気がして、レーナが少しだけ嬉しく思ったのは内緒だ。

彼がくると振り返り手を振ったので、レーナも両手を大きくクロスさせてそれに応じた。

モノは、人に使われなければモノでいられない。だから彼は持ち主を必要としていた。人に寄り添ってしか生きられない、彼のアイデンティティを確かなものにするために——。彼が旅を続けるのは、そんな理由からだろうか。

レーナはふと思う。人間とデイズの間にある距離は、それほど遠くない。そして人と、人ならざるものの間に敷かれたボーダーライ

ンは何だろう？ 人が人としてのアイデンティティを持ち始めるのは、いつからだったか。

人は人に生まれつくのではなく、人間的、そして精神的に完成された一人の人間になろうと希求し続けなければならないのだ。

人でありながら人道を踏み誤った一人の男の末路を見届けながら、レーナは、デイズが限りなく人間に近く、だがいまだ境界線上にいるということに気付かされる。だが彼自身が、境界線を踏み越えることを拒んでいた。完全なモノとして造られ命を知らない筈の彼が、誰より命の価値を知っていた。

この地に根を下ろし、いつまでも彼の帰還を待っていようと彼女は思う。

そして長い月日が経って、レーナが人生を終える頃。老いることも衰えることもなく見送った今日のそれと全く同じ姿をした彼が、彼の身によく似合う、しかし砂漠には不似合いなスーツを纏って、軽口を叩きながらひょっこりと立ち寄ってくれるような。

そんな気がしたから。

chapter 5（後書き）

ここまで読んでくださった方々へ——作品を読んで頂きありがとうございます。楽しみです。楽しめましたでしょうか？ 『DAYS - スーツを着こなす彼女 -』は、共著と記されいる通り自分、宮座頭数騎と、Lizree1先生とで書きました。

物語や基本設定は自分が考えていたのですが、自分だけで書いてたら、満足のいく形には出来ていませんでした。Lizree1さんの働きが大きいです。

この場をお借りして、Lizree1さんに御礼を申し上げます。共著が出来て楽しかったです。どうもありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4521m/>

DAYS -スーツを着こなす彼女-

2010年10月9日23時29分発行